

【研究ノート】

乙未丙申東方學雜録六首

いしみのぞむ

Six Articles on East Asia Researching in the Years Heisei 27, 28

ISHIWI Nozomu

摘要

- 【一】 尖閣の東の中外界は琉球人が清國大使に告げた
- 【二】 林子平系列圖、尖閣は臺灣と別の色、ハーバード藏
- 【三】 歐洲最早釣魚嶼地圖、設色與琉球相同
- 【四】 キッチン氏の尖閣圖、赤尾嶼で琉球色
- 【五】 千百張無下文、日看徳最早地圖、釣魚台已歸琉球
- 【六】 黄山書社『東傳福音』所收李浩然撰聖母傳和訓全文

Abstract

- 【一】 Ryukyuan told Boundary on the east side of Senkakus
- 【二】 Senkaku map of Rinshihai style, preserved in Harvard Univ.
- 【三】 1752 Oldest Senkaku map, same colour with Ryukyu
- 【四】 Thomas Kitchin Senkaku map, Ryukyu colour on Sekibisho
- 【五】 Hundred and thousand maps, no follow up report
- 【六】 Laurentius Li, The Life of Santa Maria

【一】尖閣の東の中外界は琉球人が清國大使に告げた

始出：尖閣480年史ブログ平成二十七年七月十八日投稿

西暦千六百八十三年の冊封琉球大使汪楫は、尖閣最東端の赤嶼（大正島）附近で船員から「中外之界」を告げられた。船中の琉球人が告げた言葉であることは、拙著『尖閣反駁マニユアル百題』などで既に述べてある。根拠は第一に、他の記録で臺灣海峡以東の水先案内人は琉球人であること。第二に汪楫自身の船は、臺灣海峡で一度はチャイナ人の主張する針路を採用したが、誤導したため已むを得ず琉球人の主張する針路を採用したこと。

さらに考へれば汪楫自身の『中山沿革志』に次の語が有る。曰く、
「但有彼國嚮導、便可按期出洋。」

（ただ彼の國の嚮導あれば、すなはち期に按じて洋に出づべし）と。汪楫は出航前に禮部の議論で「琉球からの朝貢使節を待つて出航せよ」と意見されたのだが、その年度は朝貢使節が来てゐなかつた。そこで汪楫が「琉球の水先案内人だけあれば出航できる」と主張したのがこの語である。勿論琉球の水先案内人無くしては出航できない。

チャイナ船が西から尖閣まで来てそのまま歸國した記録は歴代一度も無く、尖閣渡航記録は全て琉球まで渡航する。従つてチャイナ人が尖閣を知れば必ず琉球を知り、琉球を知らなければ必然として尖閣も知らない。汪楫が琉球の水先案内人を必要としたのは琉球の水路を知らないがゆゑであり、琉球を知らなければ必然尖閣を知らない。されば尖閣の東の「中外之界」は琉球人が告げたと断定できる。

琉球人が告げたのだから、中外の「中」は首里を指す可能性が極めて高い。そして他の風水記録と併せて観れば、中の首里から外の尖閣までならべて統一解釋できることも既に舊著で述べた。

【二】林子平系列圖、尖閣は臺灣と別の色、ハーバード蔵

始出：尖閣480年史ブログ平成二十七年十二月二日

ハーバード大學の電子圖像庫に、「Map of Japan Nakagome Masatomi」と題する地圖があり、尖閣及びチャイナ沿岸も含まれる。<http://hcl.harvard.edu/libraries/maps/>

林子平『三國通覽圖説』を模寫した圖であり、尖閣と臺灣とを別の色に分ける。臺灣附屬島嶼説を否定してゐる。臺灣海峡の東沙山（馬祖列島の一）は無色なので、無主地扱ひとならう。東沙山は尖閣航路の西側の入り口として歴來著名である。東沙山の西側でチャイナは盡きてをり、東方の尖閣は隨意に施された桃色だが、チャイナに屬しない。原圖中で桃色に塗るのは小笠原・尖閣・チャイナ・シベリアである。

單に東沙山に着色し忘れたと解釋するのは通じ難い。なぜなら東沙山と尖閣との中間に別の色の臺灣島を隔ててゐるため、製圖者中込政富氏は大陸と尖閣とを分離して認識した可能性が高い。そのため中間の東沙山が無色となつたのだらう。また、他の林子平圖では、東沙を臺灣色に塗るものが多い。されば中込氏が林子平圖を模する際に、尖閣の桃色がチャイナに屬することを示すとは認識しなかつたことになる。林子平圖に對するほぼ同時代人の認識として價值が有る。

ハーバードにこの圖が藏せられて尖閣を含むことは、これまで誰にも論じられてゐないやうだ。私の小さな発見といふことにならうか。林子平『三國通覽圖説』の模寫圖は各地に多數有るので、逐一調査すれば、同様の彩色により、尖閣の桃色はチャイナ領土の色として認識されなかつたことが分かるだらう。インターネットに出てゐるもの、出てゐないもの、数多い。

中込原圖の朝鮮半島と日本との間には竹嶋「鬱陵島」が畫かれ、「竹嶋」に附記して曰く、

「此の嶋より隠州を望む。又朝鮮をも見る」

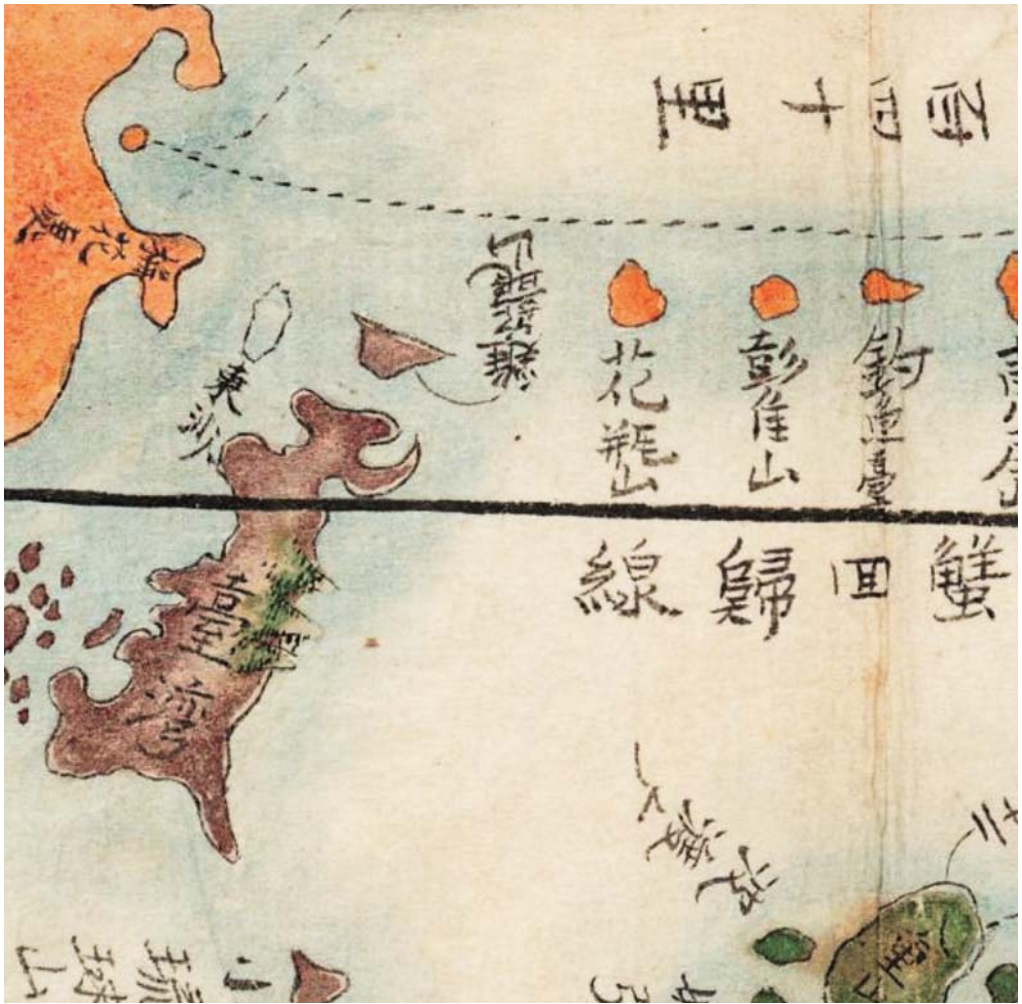
と。隠州（隠岐）を望み得るのは今の竹島でも鬱陵島でもない、これはどの島か確定できない。ただ江戸時代に竹島と呼ばれてゐたのは今の鬱陵島なので、この圖には鬱陵島が二つの情報源から重複記載されてゐるとも言へる。要するに地理認識の不確かな地圖である。また「竹嶋」に「朝鮮の持ちなり」と附記する所以は、竹島は即ち鬱陵島だから朝鮮領土だと認識された可能性が高い。

原圖の左下方に「享和元年これを模す」と署する。西暦千八百一年に當る。その下の「鏡中條村」は甲斐國巨摩郡の村名である。中込政富といふ人物は分からない。巨摩には中込といふ氏が有るやうで、野球元阪神タイガース中込伸氏、南アルプス市前市長中込博文氏が著名である。鏡中條村には江戸時代後期中込莊右衛門といふ畫家がゐたやうだが、族中の人乃至政富本人かも知れない。（参照：松田美沙子「新津家傳來肖像畫について」、山梨縣立博物館研究紀要、第九號、平成二十七年）

「Hārboard 圖像目錄」には、本圖の公開者として「Kawachiyia Tetsugoro」と著するが、原圖に見えない。背面に記載されてゐるのかも知れない。



右…中込政富日本圖より尖閣附近。

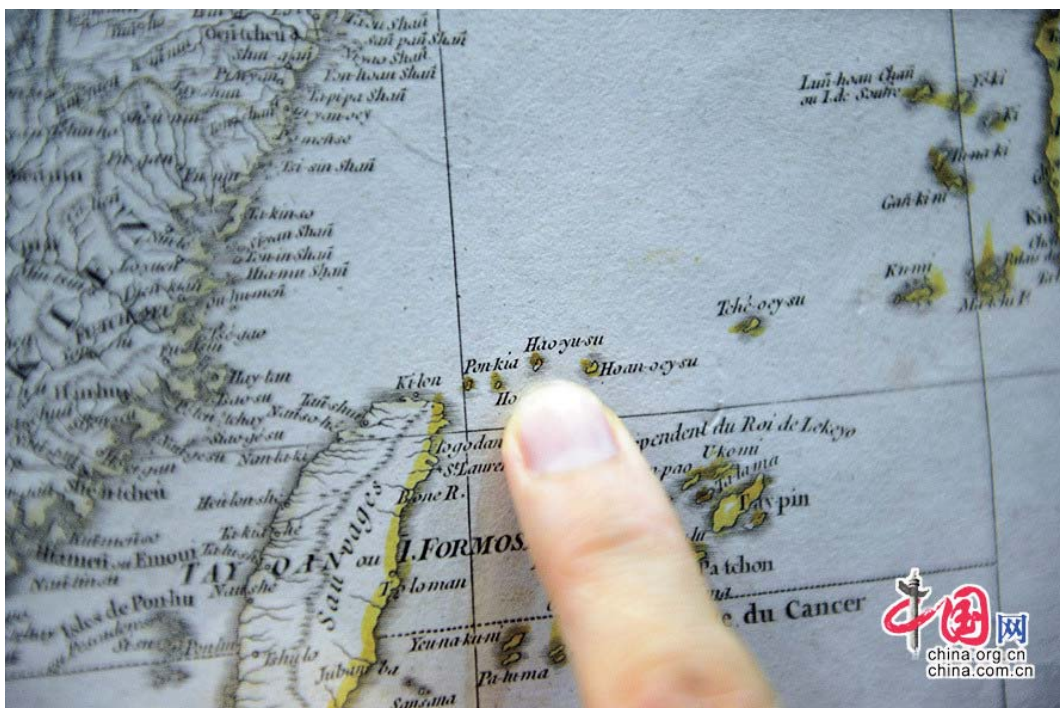


【三】歐洲最早釣魚嶼地圖，設色與琉球相同

首載尖閣480年史部落格平成二十八年一月十四日

Gaubil (宋君榮) 所製琉球圖，西曆千七百五十一年從北京寄到巴黎。釣魚臺地理訊息較為明確者，從此始入歐洲。次年唐維爾 (d'Anville) 德安維爾) 刊行「亞細亞第二」部分」圖 (原題：Second partie de la Carte d'Asie contenant La Chine et Partie de la Tartarie, L'Inde au de la du Gange, les Isles Sumatra, Java, Borneo, Moluques, Philippines, et du Japon)。⁵ 手施顏色，雖每幅異，而其中釣魚臺、琉球、臺灣島東部，多幅同色。福建及臺灣島中清國領土與此異色。其後拉彼魯茲 (La Perouse)、施蒂勒 (Stieler)、史坦福 (Stanford) 等，相繼以釣魚臺歸入琉球，成一傳統。創始者是唐維爾。平成二十六年五月三日，杭州西泠印社舉行拍賣會，一批共十九幅地圖委售成交，其中包括一幅西元千七百五十二年唐維爾製圖。中國網、新浪網、軍網、僑報網，今日玉環，今視界、楓網等新聞網路均予報導。網頁可清晰看出該圖手彩，將釣魚嶼列島及宮古八重山諸島、琉球主島、臺灣島東岸，均塗成黃顏色，與其他傳世同版唐維爾圖同例。

中國網 photo.china.com.cn











杭州第十届中国国际动漫节开幕 漫画展里新尝试

【本報專稿】由中國國際漫展主辦、杭州國際漫展承辦的第十屆中國國際動漫節，於19日在杭州國際漫展會場正式開幕。...



浙江公开2014年省級部門預算 “三公”經費壓減30%

【本報專稿】浙江省政府日前公開了2014年省級部門預算，其中三公經費壓減30%。...

浙江4月份捐獻造血干細胞8例 創歷史月捐獻量最高

【本報專稿】據省紅十字會日前公佈的數據顯示，4月份全省捐獻造血干細胞8例，創歷史月捐獻量最高。...

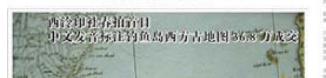


台州全年經濟走勢或“低平緩升穩走” “五一”假期兩湖遊客人數187萬人次

【本報專稿】據台州市政府日前公佈的數據顯示，今年全年經濟走勢或“低平緩升穩走”。...

浙江第一季度PM2.5考核 舟山空氣最好湖州金華空氣差

【本報專稿】據省環保廳日前公佈的數據顯示，浙江第一季度PM2.5考核，舟山空氣最好，湖州金華空氣差。...



杭州错峰限行今起升級 限行時段，早晚高峰各增半小時

【本報專稿】據杭州市政府日前公佈的數據顯示，杭州错峰限行今起升級，限行時段，早晚高峰各增半小時。...



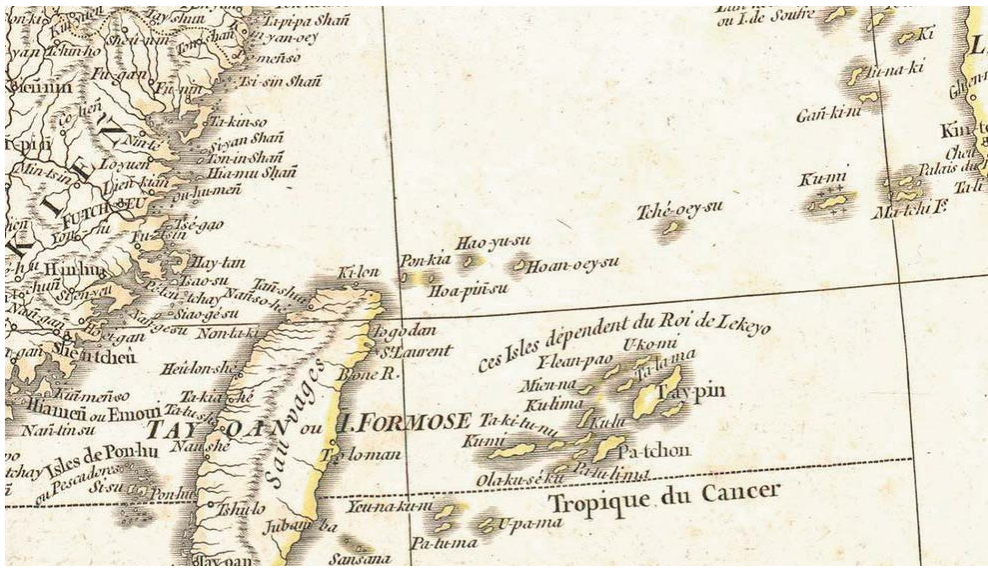


今視界（引自新華網）
jinhjtie.cn

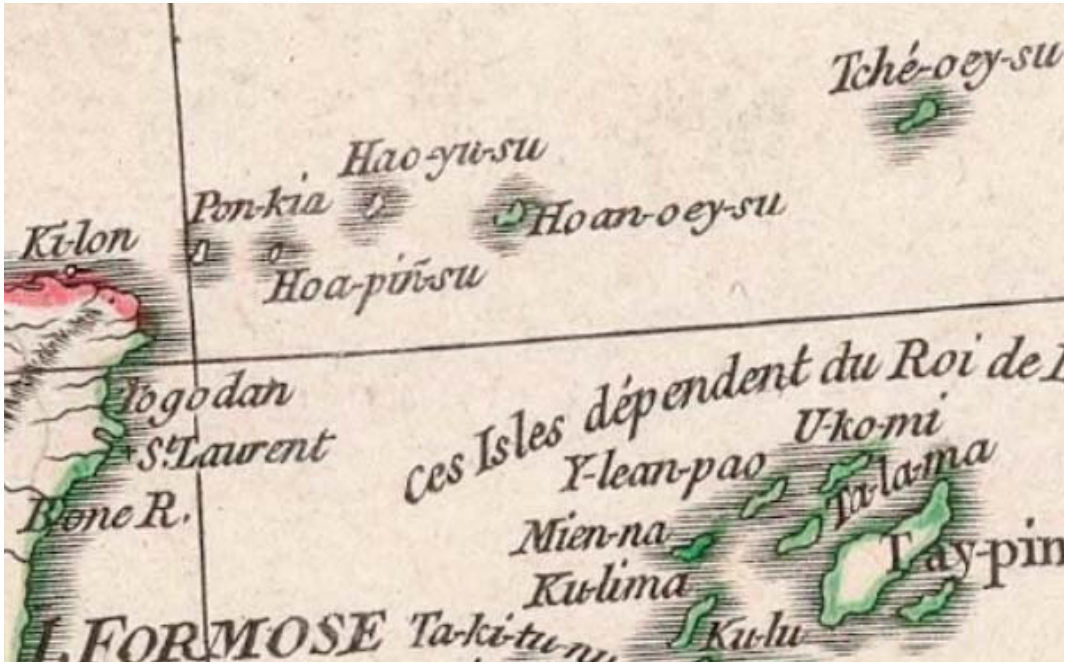
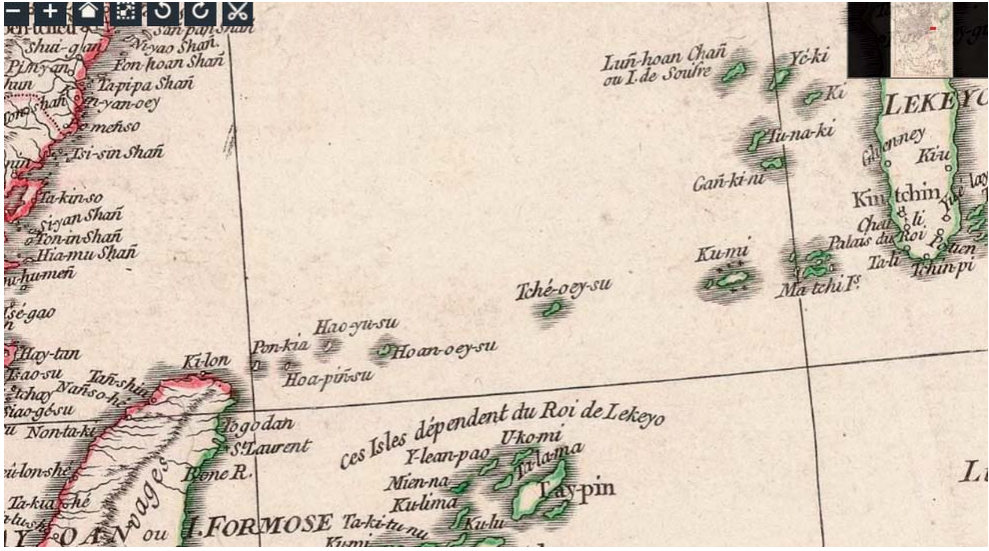


楓網（引自新華網）
www.laoren.com

西班牙文化部圖像庫展覽該圖，收藏號為 BVPB 20120060883。將清國塗
為粉紅色，釣魚嶼列島及琉球國均為黃顏色。 <http://bvpb.mcu.es>

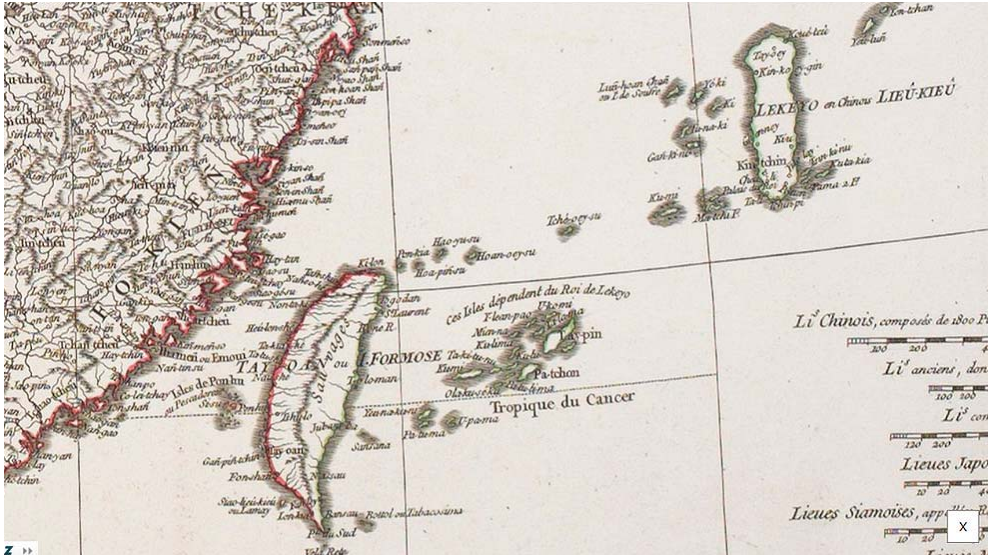


法蘭西國家圖書館亦藏該圖，塗黃尾嶼、赤尾嶼為綠色。
收藏號：ark:/12148/btv1b53083462m <http://gallica.bnf.fr>

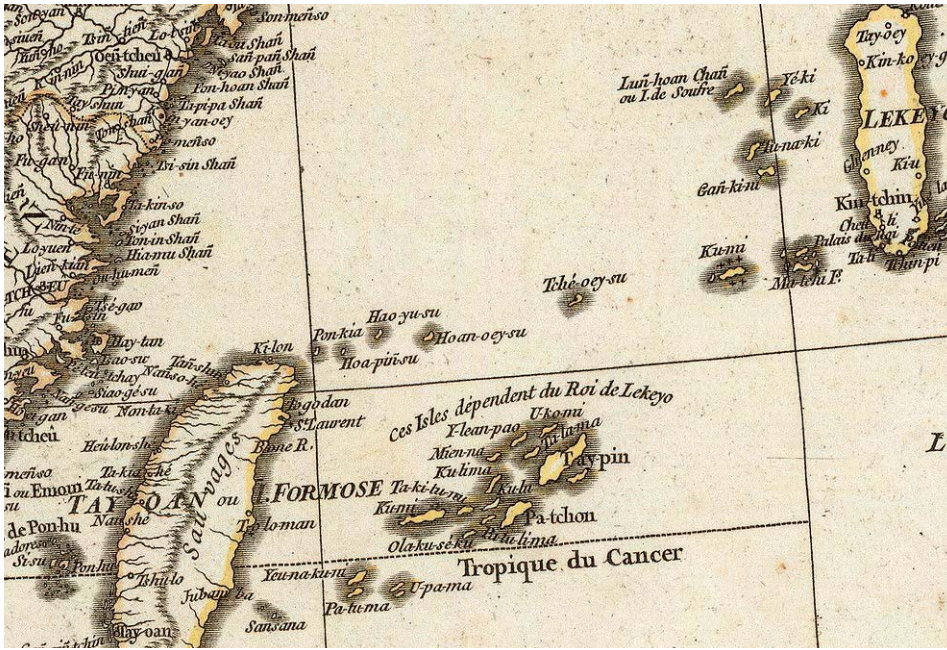


(三三)

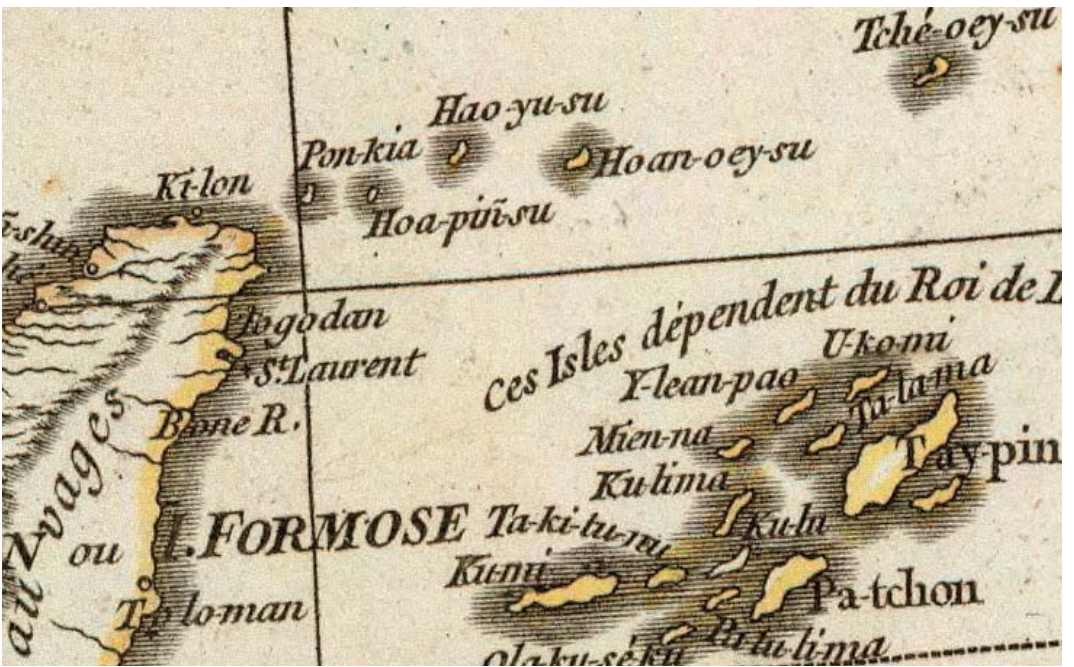
巴黎L'oeb Larocque骨董網售該圖，將彭家山、臺灣島東岸、
釣魚嶼列島、琉球國均塗成灰綠。
www.loeblarocque.com



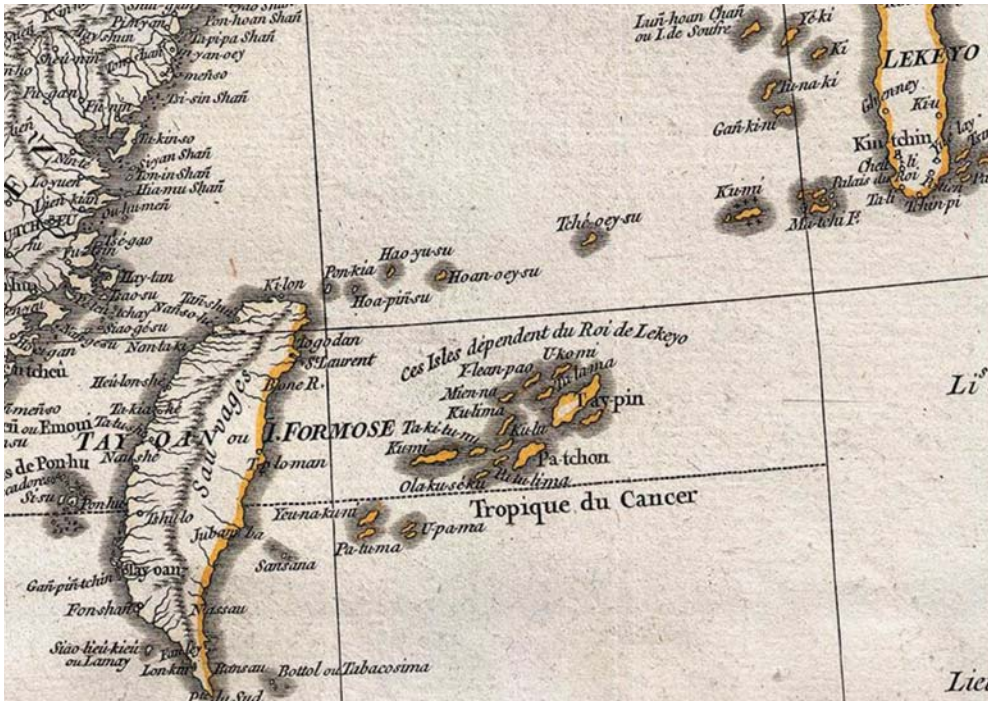
(三三三)



林氏地圖網，收藏號263006。設色與西班牙文化圖像庫相同。塗清國為粉紅色，釣魚嶼列島及臺灣島東岸、琉球國均為黃顏色，臺灣島北方彭佳嶼、花瓶嶼無色。
www.davidrumsey.com



(三四)



美國 Geographicus 骨董網有該圖，無庫存，只存電子圖。臺灣東岸、釣魚嶼、黃尾嶼、赤尾嶼為黃顏色。 www.geographicus.com



(三三)

唐維爾以下，凡塗顏色，均以尖閣諸島為琉球色，成為慣例。西元千七百九十四年，英國山姆鄧 (Samuel Dunn) 所製地圖也屬於宋君榮系列，將「Tche oey su」(赤尾嶼) 塗為琉球的土黃色。此圖標題是「日本諸島」，圖中從日本到赤尾嶼，均塗相同土黃色，赤尾嶼被認為屬於日本。黃尾嶼、釣魚嶼均無色，是無主地。

山姆鄧 (Samuel Dunn)
「支那諸省及日本諸島圖」
(China, Divided into its
Great Provinces, and the
Isles of Japan)
西元一千七百九十四年製。
http://digitallibrary.usc.edu
南加州大學收藏號：
G 78101794.D 92
赤尾嶼及宮古八重山為土
黃色，臺灣島為翠綠色。



鄧氏圖的收藏者南加州大學，專門蒐集一些將日本海寫作「高麗海」，「東海」的地圖。其實歐洲所製數以萬計的多幅地圖中，寫作「日本海」者占多數，南加州大學電子庫一概不收。該圖像庫因此而惡名昭彰。但日本海的名稱和釣魚臺不太相干，且地圖原作者鄧氏也沒有特殊政治意圖。本稿自可予以討論。

另有西元一千七百九十五年，奧地利人賴利氏所製「重訂唐維爾氏亞細亞圖」第四幅，從尖閣諸島及八重山，到臺灣東南方綠島、蘭嶼，均塗紅色。該圖的分色法，率先示範給此後的地理認知，成為西元十九世紀的主流。



Franz Johann Joseph von Reilly 「Karte von Asien」
第四幅 林氏地圖網 davidrumsey.com 收藏號11151007
從臺灣島到清國內地均塗黃顏色，而從琉球主島、
宮古、八重山及尖閣，到綠島、蘭嶼，均塗紅色。

【四】キッチン氏の尖閣圖、赤尾嶼で琉球色

始出：尖閣480年史ブログ平成二十八年一月二十五日

平成二十六年の拙著『尖閣反駁マニユアル百題』の第三百七十三頁及び彩色圖十一では、「ダンビル傳授アジア及び島嶼圖」に論及した。原題：「Asia and its Islands according to d'Anville」。ラムゼー氏電子圖像庫番號2310053。西曆千七百九十九年製。赤尾嶼（大正島）が琉球國及び日本各藩國と同じく赤色となつてゐる。

もつづいた原作は西曆千七百五十二年以來流布したダンビル圖だが、この西曆千七百九十九年圖そのものの製作者はトマス・キッチン（Thomas Kitchin）だとラムゼー氏が註し、圖中に出版業者ロバート・ローリー（Robert Laurie）及びジェームズ・ホイットル（James White）の署名がある。別頁の南北と合成すべき大圖の中央部分であり、合成したものが別にラムゼー圖像庫番號2310055として出てゐる。圖冊の標題頁は脱落してゐるが、ラムゼー氏の考察によればキッチンの舊作にもとづきローリーとホイットルが改訂刊行したとのことだ。下述の通りキッチン氏圖冊は舊版が幾つか有る。

さてその同じ標題「Asia and its islands according to d'Anville」の同じ圖を、同じローリー、ホイットルが少し早い西曆千七百九十四年に刊行したものが、骨董店Geographicus.comに出てゐるので、今掲載する。西曆千七百九十九年版と同じく赤尾嶼（大正島）が日本本土及び琉球國と同じ赤色となつてゐる。拙著『尖閣反駁マニユアル百題』ではラムゼー圖像庫に限定して掲載したので、この圖は収めなかつた。この前後の年代で同類の分色は珍しくないのである。骨董店サイトでは1784と書かれてゐるが、圖の左上には西曆千七百九十四年倫敦フリート・ストリート五十三番地とある。キッチンが歿したのが西曆千七百八十四年なのでかく誤標したのかも知れない。



LONDON,
 Published by LAURIE & WHITTLE, N^o. 53, Fleet Street.
 12th May
 1794.

さて、同じ圖の西曆千七百八十七年版がラムゼー圖像庫に有る。年度は早い、こちらは琉球、赤尾嶼、日本、清國が全て黄色なのが残念な處だ。同じ年度の版をインターネットで捜せば、西曆千七百九十四年版と同じく赤尾嶼及び琉球を赤色に塗つたものがあるかも知れない。

圖中の出版業者の署名はローリーとホイットニーでなく、ロバート・セイヤー (Robert Sayer) となつてをり、西曆千七百九十年の圖册『A general atlas, describing the whole universe (通用全世界圖册)』の内の一冊であるが、圖册の標題頁にはキッチンが作者として署名し、セイヤーが出版業者として署名する。出版地はローリー、ホイットルと同じフリート街五十三番地である。書誌によれば、セイヤーの歿後にローリーが業務を引き継いだとのことだ。

キッチンは西曆千七百八十四年に歿し、セイヤーは西曆千七百九十四年に歿した。さればキッチン・セイヤー舊版は琉球をチャイナの黄に塗り、後のローリー・ホイットル新版二種が琉球を日本の赤に塗り換へたといふことになる。そこに何らかの認識の進展があるのかも知れないが、門外漢には分からない。ただ琉球がチャイナ内から日本内へ、認識が正されて行く趨勢には合致する。

製圖者トーマス・キッチン (Thomas Kitchin) は、書誌によれば英國の版畫家、兼地圖製作家であり、英國海軍水路志の編纂事業にも參與したといふ。



【五】千百張無下文 且看德最早地圖 釣魚台已歸琉球

案平成二十七年九月十八日，本人在臺北市濟南路臺大校友會館開一場記者會，公布本篇，並投稿於關鍵評論網。該網編輯要求我回答若干疑問，本人於九月二十五日以電子信補充三條。至十月三日上午十時始獲登載該網，但原文已遭多處竄改。該網保留刪改權，本人沒有異議，但本人也有批判權。今將九月十八日原文及二十五日補充之語，重錄於此，原封不動，一字不改。未附關鍵評論網竄改版本，以供比較。

* * * * *

今年（西元2015年）三月，日本外務省網頁正式上傳西元2006年中華人民共和國所繪尖閣群島地圖，作日本主權補證之一。共和國外交部發言人洪磊隨即揚言：

「可以找出一百張、甚至一千張明確標注釣魚島屬於中國的地圖。」此說一出，在日本惹來一陣嘲笑謾罵。在台灣則各說各的，其中似有藍綠分色。

我研究釣魚台史已四年，知道千百張都會是什麼樣的圖，想先等他拿出來，展開一場地圖戰。等了半年，共和國方面遲遲沒有聲音。不得已，這裏先拿出兩張來給諸位看吧（圖1、圖2）。

圖1：西元1887年 “China” 收於 “Stanford's London atlas of Universal Geography” (倫敦丹福氏世界地理圖冊)。澳洲國家圖書館藏。收藏號 MAP Ra 186. Part 67。 <http://nla.gov.au>



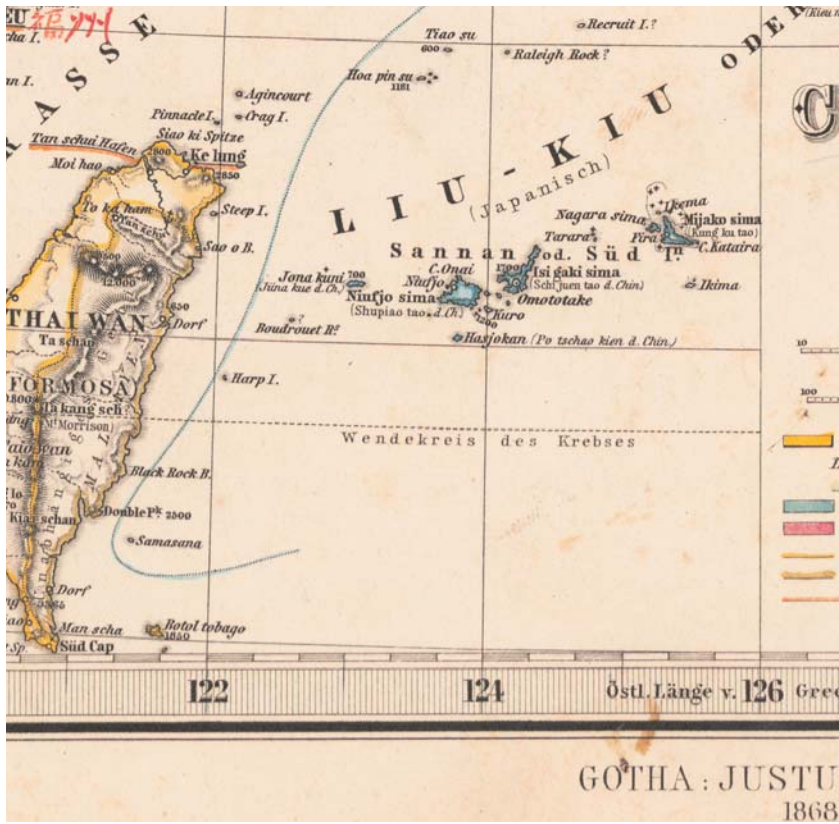


圖 2：西元1868年 “China Korea und Japan” (支那圖) 收於 “Stielers Hand Atlas” (施蒂勒世界圖冊) 今錄自いしむのぞむ著《尖閣反駁ミニシア 川百題》 原典藏東京大學

(四〇)

這兩張圖在釣魚台西側各劃一條界線，清楚顯示釣魚台屬於琉球。施蒂勒西元1868年地圖（圖2）是首印，其後每兩三年就重刊一次。重刊版本在網路流傳很多，但首版不見流傳，首版的界線是我首次論及的，今年（2015年）6月，《產經新聞》曾予以報導。1868年適逢明治維新，日本人直到西元1895年才把釣魚台編入國土，歐洲人早在明治維新時就先劃歸這是為什麼，歐洲人那麼願意幫倭寇的忙。要知端的，須上溯歷史。且看年表：

【西曆年表】

- 1750年以前 釣魚台和宮古石垣群島無法分辨，統稱「黎斯馬古斯」(Reyes Magos)。
 - 1751年 法國宋君榮神父 (Gaubil) 《琉球錄》從北京寄往巴黎。此後歐洲人明確認知釣魚台，寫作「Tiao-yu-su」(釣魚嶼)。
 - 1787年 法國航海家拉彼魯茲 (La Pérouse) 到達釣魚台，認為屬於琉球。
 - 1797年 拉彼魯茲游記印行，有附錄地圖。
 - 1800年 德國施蒂勒 (Stieler) 繪製 China 地圖，採用拉彼魯茲訊息無琉球專欄。
 - 1804年 施蒂勒繪製 China 地圖，始設琉球專欄，將釣魚台放在欄中，與琉球同色。
 - 1868年 明治維新，施蒂勒世界圖冊首次在釣魚台西側劃一條界線。
 - 1887年 英國史丹福氏 (Stanford) 所製地圖在釣魚台西側劃一條界線。
 - 1895年 日本政府將釣魚台編入國土。
- 年表中的1788年，法國航海家拉彼魯茲遠航東亞，留下一本著名的游記《Voyage de La Pérouse》(拉彼魯茲航海錄)。他從台灣島南端沿東岸向北航行，進入琉球海域時，游記中寫下一句：
- 「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球。」

數日後到達釣魚台，測繪島形，為目前所知歐洲人首例。然後向北離開，寫下另一句：

「現在離開琉球群島。」

兩句話千鈞之重，首次將釣魚台明確歸入琉球國管轄之中，惜未廣泛引起釣魚台專家的注意。然而這決不是不經意的輕描淡寫。拉彼魯茲總結了前此兩百年歐洲人在 China 東海航行的經驗，加上目睹之談，才得有此。本稿且不談那段歷史，專談拉彼魯茲以後產生的回響。

圖3：1804

H.F.A. Stieler

(施蒂勒)

“Charte von

China”

(支那圖)

いしみのぞむ藏。



西元1802年，德國製圖大師施蒂勒 (Stieler) 的地圖 (圖3)，將釣魚臺劃歸琉球框線中。這是東亞地圖中的創例，在我之前，從來沒有人發現昨天 (9月17日) 我在東京的自民黨總部剛向傳媒公布這一最新事實，內外反應會如何呢，目前尚不明朗。

看了此圖，網友立刻會質疑，豈不是因框線為方形，無法將釣魚台排除在外麼。很遺憾，決不是。首先我們必須瞭解一下歐洲人認知東亞海域的過程。西元16世紀，葡萄牙人最早進入東亞，以澳門為基地。17世紀，荷蘭人開闢新土，由雅加達轉向澎湖、台灣。西班牙人從呂宋來，沿台灣島東岸北上，佔據雞籠。在此年代，認知釣魚台都是比較模糊的，多數和宮古石垣群島混在一起。到18世紀，琉球早已在日本海禁下，歐洲人無法進入境內，只得由法國宋君榮 (Gambil) 神父把漢文琉球志譯成法文，從北京寄到巴黎，其中首次包含明確的釣魚台地理訊息。法國拉彼魯茲周游太平洋，在琉球附近海域使用的就是宋君榮的地圖。德國人一直沒有機會參與其間，施蒂勒只得根據法國人提供的訊息繪製地圖，標題「Charte」(地圖) 就是法文，不是德文的「Karte」。

觀此史勢即知，施蒂勒繪製琉球專框時，必然要使用宋君榮及拉彼魯茲的報告。宋君榮的地圖業已普及50年，而拉彼魯茲的報告則是西元1797年才剛刊行的最新訊息。西元1804年施蒂勒地圖中，有八個迹象顯示該圖根據拉彼魯茲的報告而製。訊息來源決定了施蒂勒必然認為釣魚台屬於琉球，不是無主地或清國屬地。現在把八個迹象逐一剖解如下。

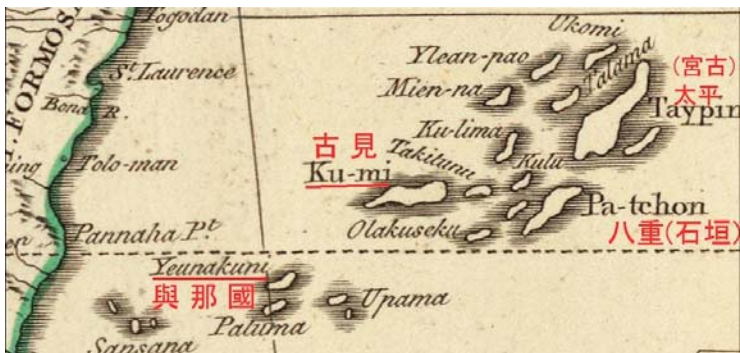
【1】圖中顏色表示政治劃分，釣魚台塗成黃顏色 (圖4)，與琉球相同。台灣、福建則是粉紅色，不同於釣魚台。這不是隨意的，因琉球框線中，右上方還包括一部份薩摩國 (鹿兒島)，也塗成粉紅色，表示不屬於琉球。依同樣標準，釣魚台也可以塗粉紅色，來表示它屬於台灣、福建。或者不塗顏色，表示它是無主地。施蒂勒不這樣做，他的訊息來源只有一個：「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球。」首府 (capital) 是政治詞彙，不只是自然地理。



圖 4 : 1804
H.F.A. Stieler "Charte von China"
琉球專欄「いごのぞむ藏」。

【2】 拉彼魯茲「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球」一語，是他自己的認知。他雖然參考了宋君榮的敘述，但宋君榮原書沒有此句。說明施蒂勒的政治劃分來自拉彼魯茲，不來自別人。

【3】拉彼魯茲沿台灣島東岸北上，到達琉球的「Kumi」島，認為是琉球西南七八個群島的最西端。然而在宋君榮系統的地圖中，「Kumi」島（即日文「古見」山）位於與那國的東邊（圖5上），施蒂勒卻把它移到與那國的西邊（圖5下）。訊息來源顯然是拉彼魯茲。



【4】拉彼魯茲到達釣魚台時說，「宋君榮神父的地圖中，釣魚台太南，今將緯度實測，卻宜微北。」現在看宋君榮系統的地圖中，的確把釣魚台放得太南（圖6上），而施蒂勒則比較靠北，相形之下彭佳嶼微南（圖6下）。顯然根據拉彼魯茲的報告而校正過。看得出他對釣魚台十分執著，不輸馬英九、石原慎太郎。



圖5：〔上〕1794 d'Anville (唐維爾) "The Empire of China" (中國帝邦) 宋君榮系統 Kumi 嶼在東。www.davidrumsey.com no.2310070
〔下〕1804 Stieler (施蒂勒) "Charte von China" (中國地圖) Kumi 嶼在東。

圖6：〔上〕1794 d'Anville (唐維爾) "The Empire of China" (中國帝邦) 宋君榮系統 釣魚台太南。www.davidrumsey.com no.2310070
〔下〕1804 Stieler (施蒂勒) "Charte von China" (中國地圖) 釣魚台微北。

【5】宋君榮系統的地圖，釣魚台列島中各島都是單個的（圖6上），拉彼魯茲則把釣魚台及附近的南北小島各作群島來描述。施蒂勒也把釣魚台及南北小島各繪作群島（圖6下），恪守拉彼魯茲的實地紀錄。

【6】宋君榮系統的地圖，把台灣北方三島中的彭佳嶼畫得靠東些，離釣魚台較近，離台灣島較遠（圖6上）。施蒂勒依此也把彭佳嶼畫在琉球框線中（圖6下），並且根據「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球」一語，塗上黃顏色，屬於琉球。這固然不符史實，但宋君榮以下一系列的地圖中，彭佳嶼都靠東，給人印象就屬於琉球，施蒂勒不過是遵循成例而已。至於拉彼魯茲，游記首版編者註腳說：

「宋君榮圖中，釣魚台、南北小島、彭佳嶼三者互相等距，唯獨彭佳嶼未為拉彼魯茲所目睹，不知何故。」

施蒂勒據此，把彭佳嶼畫得西面些，距離釣魚台較遠（圖6下），意在配合編者註腳。雖靠西，而未越出琉球框線，看得出他綜合了宋君榮和拉彼魯茲的敘述，審慎釐定彭佳嶼及釣魚台的位置，不敢粗心大意。

【7】拉彼魯茲航行澎湖群島之南，忽逢海底有一帶暗沙，即現今所稱「台灣堆」，以好漁場著稱。拉彼魯茲游記說：「前此海圖都沒有記載此處暗沙，不知道暗沙有無盡頭。」他大概沒看過早期荷蘭人繪製周密的澎湖、台灣地圖。現代人很容易看到荷蘭人繪製第二（Keulen II）的著名福爾摩沙地圖中，繪載台灣堆很大（圖7）。拉彼魯茲所繪地圖中，暗沙形狀迥異於科伊倫（圖8上），並在暗沙邊註云「暗沙不知盡頭」。施蒂勒繼承了拉彼魯茲所繪形狀及所加註文（圖8下），務期克肖。我們由台灣堆的繪法，知道釣魚台亦必繪製嚴謹。



圖7：1753 Johannes van Keulen II（科伊倫第二）
 “De Nieuwe Groote Liggende Zee-Fakkel”（海炬新耀）
 www.geheugenvannederland.nl 電子收藏號 NESA 01:k:06-1350。

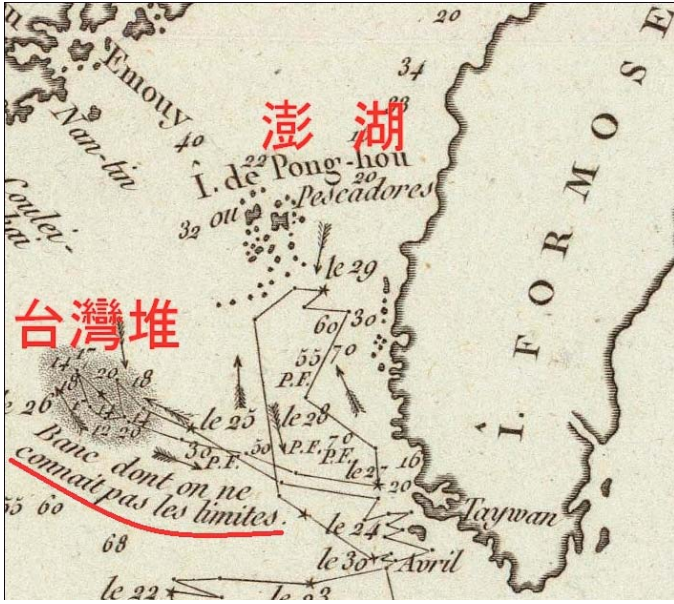


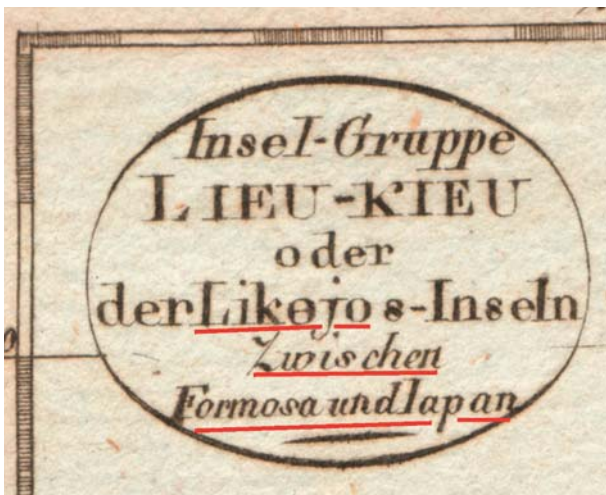
圖8：〔七〕 1797 La Pérouse (拉彼魯茲)
www.davidrumsey.com no.3355043
"Carte des decouvertes, faites en 1787 dans les mers de Chine et de Tartarie"
(附圖1787年支那韃靼海域探圖) 澎湖及台灣堆。

〔七〕 1804 Stieler (施蒂勒) "Charte von China"
澎湖及台灣堆。
いしみのぞむ藏。



【8】 拉彼魯茲的報告中，琉球二字寫作「Liqueu」，「Liqueu Yo」，「Liqueo」。在他以前，各本地誌只有「Lek」，「Lio」開頭的寫法，唯獨拉彼魯茲有「Liek」開頭。施蒂勒1804年圖的標題有「Likejo」出現(圖9)，可知來源是拉彼魯茲。這裏還須注意，琉球標題下面有一句「處於福爾摩沙和日本之間」(zwischen Formosa und Japan)。地圖總標題雖是「China」，但另設琉球專欄的目的，在於從清國分別開來，表示它是清國和日本中間的一邦，不是清國領土。

圖9：1804 Stieler (施蒂勒)
"Charte von China"
琉球欄標題 いしみのぞむ藏。



(四五)

以上八個迹象，顯示施蒂勒一絲不苟，根據前人的紀錄判定釣魚台屬於琉球。施蒂勒還有西元1817年、1822年、1826年的地圖，均皆劃分如此。直至1888年，施蒂勒圖冊終於在釣魚台西側劃一條界線（圖2）。其後史丹福（圖1）等數家所製地圖相繼做此，成為慣例。可我們不能忘記，迄此年代為止，釣魚台還是無主地，尚未劃歸日本。歐洲人先劃歸，是洞察幾微呢，抑或與倭寇朋比為奸。個中因果，說來話長。

最後提醒一下。有人說釣魚台的拉丁字「Tiao-yu-su」是清國官話，顯示釣魚台屬於清國。這種說法完全錯誤。清國官話還用在琉球專欄中的「Na-pa-kiang」（那霸港）、「Tai-ping-shan」（太平山，即宮古島）等地，不僅釣魚台而已。要講拉丁字的細節，字數太多了，等下次有機會再講吧。

【補充】

本稿首次公布於西元2015年9月8日，在正式刊載前承蒙關鍵評論網提出若干疑問，茲敬答。

問1：拉彼魯茲「首府」之說，依據來源為何？應要有官方文件佐證。參考的可信度？能否有更多佐證？

答1：這是拉彼魯茲的個人見解，首見於西元1797年刊行的《Voyage de La Pérouse》（拉彼魯茲航海錄）中。拉彼魯茲為什麼會這麼認為，雖然是個謎，但在鄙著《尖閣反駁マニユアル百題》之中已作探討，有意者可購買。今摘要如下。西元16世紀以前，台灣島（小琉球）和琉球國（大琉球）之間的區分尚不明朗，往往統稱琉球。西元1609年西班牙人開關台灣島東岸航線，由呂宋經台灣島東岸、與那國島、釣魚台、飛渡東海，到達長崎，途中不經過明國領土。進入清國以後，清國方志及歐洲人地誌、地圖多數正確記載台灣島內清國領土東至大山（中央山脈）為止。西元1751年宋君榮神父的《琉球志》傳到歐洲，其後刊行的地圖往往把台灣島東岸及琉球國塗成一色，可能代表了一種誤解：除清國台灣府外，都是古琉球之地，

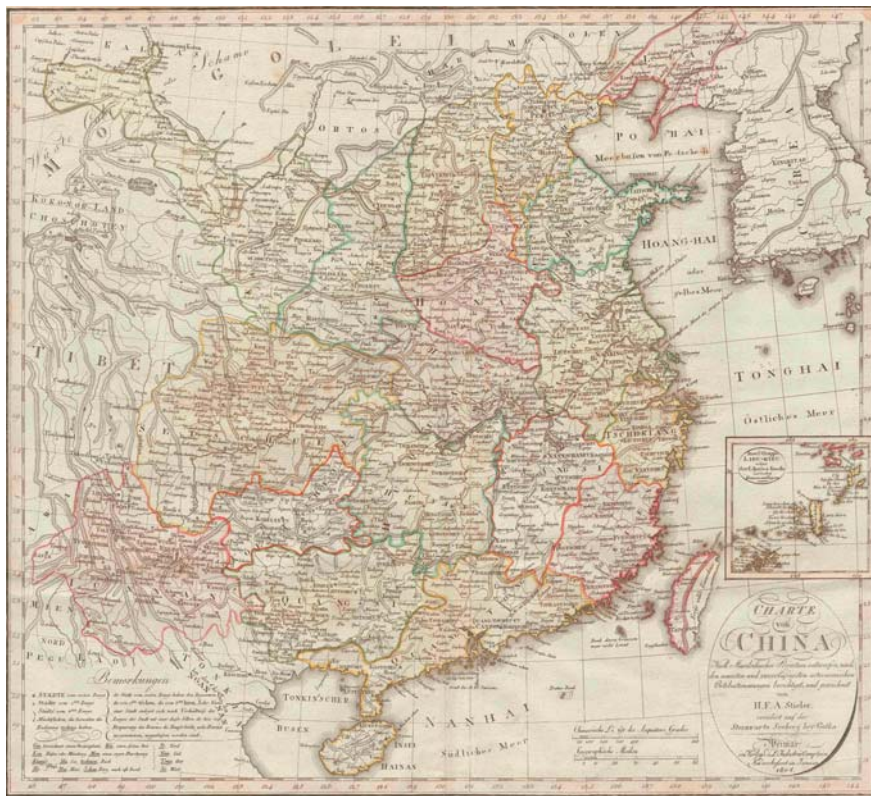
屬於琉球國，包括台灣島東岸在內。西元1787年拉彼魯茲也經過台灣島東岸，到達琉球國海域，可能承襲了這種誤解。雖是誤解，但代表了一個歷史的原因：台灣島東岸航線的西側是無主地，東側是琉球國，清國不參與其間。在此時空環境下，很容易誤認台灣島東岸以東全是琉球國領土。

問2：假如用顏色作為主權的區分，那麼台灣、福建、薩摩國（鹿兒島）皆為粉紅色，浙江和釣魚台、琉球都為黃色，所代表的意義是？

答2：西元1826年施蒂勒地圖中的顏色代表了政治區分，不代表國家主權的區分。顏色數目有限，多有重複。浙江、釣魚台、琉球同色，不代表琉球和釣魚台屬於浙江。台灣、福建、薩摩國同色，不代表薩摩國屬於台灣。福建、但琉球和釣魚台相隣而同色同框，可推測為相同政治區分。同理，琉球那霸主島和太平山（宮古島）相隣而同色同框，亦可推測為相同政治區分。釣魚台和台灣、福建不同框、不同色，可推測為不同的政治區分。這是施蒂勒個人見解，有歷史意義，沒有國際法意義。

問3：拉彼魯茲「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球」一語，是他自己的認知。他指的是拉彼魯茲還是施蒂勒？

答3：指拉彼魯茲。該句可改作：拉彼魯茲「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球」一語，是拉彼魯茲自己的認知。



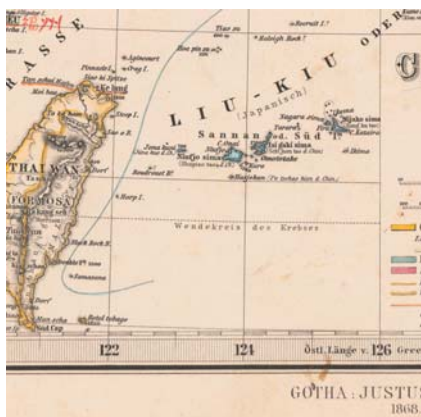
【關鍵評論網讀改版本】 <http://www.thenewslenz.com/post/222650/>
 2009年前德國製圖大師施蒂勒的地圖：釣魚臺歸劃在琉球框線內
 2015 / 10 / 03 10:00:00 發表
 讀者投書 文：いしみのぞむ（長崎純心大學副教授）

今年3月，日本外務省網頁正式上傳西元1969年中華人民共和國所繪尖閣群島地圖，作日本主權補證之一。中國外交部發言人洪磊隨即揚言：「可以找出一百張，甚至一千張明確標注釣魚島屬於中國的地圖。」我研究釣魚台史已四年，知道千百張都會是什麼樣的圖。等了半年，中國方面遲遲沒有聲音，這裏先拿出兩張來給諸位看吧。

圖1：屈臣氏1887年 China
 收於 Stanford's London atlas of
 Universal Geography
 (倫敦史丹福氏世界地理圖冊)。
 澳洲國家圖書館藏。
 收藏號 MAP Ra 186, Part 67。



圖2：西元1868年
China Korea und Japan
收於 Stieler's Hand Atlas
(施蒂勒世界圖冊) 今錄自
いしみのぞむ著《尖閣反駁マ
ニアル百題》, 原典藏東京
大學。



這兩張圖在釣魚台西側各劃一條界線，清楚顯示釣魚台屬於琉球。圖2是施蒂勒 (Stieler) 1868年的地圖，是首版，其後每兩三年就重刊一次，重刊版本是較多人所知，首版則較少流傳，而關於首版所繪界線是我首度提出，今年6月《產經新聞》也曾予以報導。

1868年適逢明治維新，日本人直到1895年才把釣魚台編入國土，歐洲人早在明治維新時就先劃歸，至於為什麼，須上溯歷史，看年表：

- 1750年之前，釣魚台和宮古石垣群島無法分辨，統稱 Reyes Magos。
- 1751年，法國宋君榮神父 (Gaubil) 從北京寄《琉球錄》往巴黎。
- 此後歐洲人明確認識釣魚台，寫作「Tao-yu-su」(釣魚嶼)。
- 1787年，法國航海家拉彼魯茲 (La Pérouse) 到達釣魚台，認為屬於琉球。
- 1797年，拉彼魯茲游記印行，有附錄地圖。
- 1800年，德國施蒂勒繪製中國地圖，採用拉彼魯茲訊息。無琉球專欄。
- 1804年，施蒂勒繪製中國地圖，始設琉球專欄，將釣魚台與琉球同色。
- 1868年，明治維新，施蒂勒世界圖冊首次在釣魚台西側劃一條界線。
- 1887年，英國史丹福氏 (Stanford) 所製地圖在釣魚台西側劃一條界線。
- 1895年，日本政府將釣魚台編入國土。

年表中的1787年，法國航海家拉彼魯茲遠航東亞，留下一本著名的游記《Voyage de La Pérouse》(拉彼魯茲航海錄)。當時，他從台灣島南端沿東岸向北航行，進入琉球海域時寫下一句：「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球。」

數日後到達釣魚台，測繪島形，為目前所知的歐洲人首例，然後向北離開，寫下另一句：「現在離開琉球群島。」

兩句話千鈞之重，是將釣魚台明確歸入琉球國管轄之中，惜未廣泛引起釣魚台專家注意。此為拉彼魯茲總結了前此兩百年歐洲人在中國東海航行的經驗，加上目睹之談，才得有此。

拉彼魯茲為什麼會這麼認為，雖然是個謎，但在鄙著《尖閣反駁マニアル百題》之中已作探討，今摘要如下：

西元16世紀以前，台灣島(小琉球)和琉球國(大琉球)之間的區分尚不明朗，往往統稱琉球。西元1626年西班牙人開闢台灣島東岸航線，由呂宋經台灣島東岸，與那國島、釣魚台、飛渡東海，到達長崎，途中不經過明國領土。

進入清國以後，清國方志及歐洲人地誌，地圖多數正確記載台灣島內清國領土東至大山(中央山脈)為止。西元1751年宋君榮神父的《琉球志》傳到歐洲，其後刊行的地圖往往把台灣島東岸及琉球國塗成一色，可能代表了一種誤解：除清國台灣府外，都是古琉球之地，屬於琉球國，包括台灣島東岸在內。西元1788年拉彼魯茲也經過台灣島東岸，到達琉球國海域，可能承襲了這種誤解。雖是誤解，但代表了一個歷史的原因：台灣島東岸航線的西側是無主地，東側是琉球國，清國不參與其間。在此時空環境下，很容易誤認台灣島東岸以東全是琉球國領土。

以下本稿將要專談拉彼魯茲以後產生的迴響。

西元1804年，德國製圖大師施蒂勒 (Stieler) 的地圖(圖3)，是將釣魚臺劃歸琉球框線中，是東亞地圖中的創例，在此之前，從來沒有人發現。

圖 3：
1804 H.F.A. Stieler (施蒂勒)
Charte von China いしみのぞむ藏。



看了此圖，讀者或許會質疑，是否是因框線為方形，無法將釣魚台排除在外嗎？很遺憾，決不是。

首先我們必須瞭解一下歐洲人認知東亞海域的過程。西元16世紀，葡萄牙人最早進入東亞，以澳門為基地，17世紀，荷蘭人開闢新土，由雅加達轉向澎湖、台灣。西班牙人則從呂宋來，沿台灣島東岸北上，佔據雞籠。

在此年代，認知釣魚台都是比較模糊的，多數和宮古石垣群島混在一起。到18世紀，琉球早已在日本海禁下，歐洲人無法進入境內，當時是由法國宋君榮 (Gambin) 神父把漢文《琉球志》譯成法文，從北京寄到巴黎，首次包含了明確的釣魚台地理訊息。

而當法國拉彼魯茲周游太平洋時，在琉球附近海域使用的就是宋君榮的地圖。在此過程中，德國人一直沒機會參與，施蒂勒只得根據法國人提供的訊息繪製地圖，標題「Charte J (地圖，例如圖3) 就是法文，不是德文的「Karte」。

觀此史勢即知，施蒂勒繪製琉球專框時，必然是使用宋君榮及拉彼魯茲

的報告。宋君榮的地圖已普及50年，而拉彼魯茲的報告則是1797年才剛刊行的最新訊息。

而在1804年施蒂勒地圖中，有八個跡象顯示該圖根據是拉彼魯茲的報告而製，而此訊息來源因而決定施蒂勒認為釣魚台屬琉球的原因。現在把八個跡象逐一剖解如下：

一、圖中顏色表示政治劃分，釣魚台塗成黃顏色(圖4)，與琉球相同，台灣、福建則是粉紅色，不同於釣魚台。這不是隨意的，因琉球框線中，右上方還包括一部份薩摩國(鹿兒島)，也塗成粉紅色，表示不屬於琉球依同樣標準，釣魚台也可以塗粉紅色，來表示它屬於台灣、福建。或者不塗顏色，表示它是無主地。施蒂勒的訊息來源只有一個：「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球。」於此，首府(capital)是政治詞彙，不只是自然地理。

圖 4：
1804
H.F.A. Stieler
"Charte von China"
琉球專欄
いしみのぞむ藏。



西元1804年施蒂勒地圖中的顏色代表了政治區分，不代表國家主權的區分，琉球和釣魚台相隣而同色同框，推測為相同政治區分，這是施蒂勒個人見解，有歷史意義，沒有國際法意義。1804，H.F.A. Stieler（施蒂勒）Charite von China 全圖。

一、拉彼魯茲「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球」一語，是拉彼魯茲自己的認知。他雖然參考了宋君榮的敘述，但宋君榮原書沒有此句，說明施蒂勒的政治劃分來自拉彼魯茲，不自別人。

三、拉彼魯茲沿台灣島東岸北上，到達琉球的「Kumi」島，認為是琉球西南七八個群島的最西端。然而在宋君榮系統的地圖中，「Kumi」島（即日文「古見」山）位於與那國島的東邊（圖5上），施蒂勒卻把它移到與那國島的西邊（圖5下）。訊息來源顯然是拉彼魯茲。

圖5：(上) 1794 d'Anville (唐維爾)

"The Empire of China"

(支那帝邦)

宋君榮系統

Kumi 島在東。

www.davidrunsey.com

no.2310070

(上) 1804 Stieler

(施蒂勒)

"Charite von China"

いづれのぞむ藏。

Kumi 島在西。



四、拉彼魯茲到達釣魚台時說，「宋君榮神父的地圖中，釣魚台太南，

今將緯度實測，卻宜微北。」現在看宋君榮系統的地圖中，的確把釣魚台放得太南（圖6上），而施蒂勒則比較靠北，相形之下彭佳嶼微南（圖6下），顯然根據拉彼魯茲的報告而校正過。

圖6：(上) 1794 d'Anville (唐維爾)

"The Empire of China"

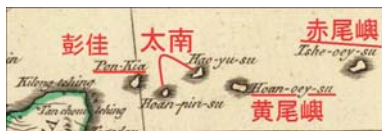
宋君榮系統 釣魚台太南。

www.davidrunsey.com no.2310070

(下) 1804 Stieler (施蒂勒)

"Charite von China" いづれのぞむ藏。

釣魚台微北。



五、宋君榮系統的地圖，釣魚台列島中各島都是單個的（圖6上），拉彼魯茲則把釣魚台及附近的南北小島各作群島來描述。施蒂勒也把釣魚台及南北小島各繪作群島（圖6下），恪守拉彼魯茲的實地紀錄。

六、宋君榮系統的地圖，是把台灣北方三島中的彭佳嶼畫得靠近東邊一些，離釣魚台較近，離台灣島較遠（圖6上）。施蒂勒依此也把彭佳嶼畫在琉球框線中（圖6下），且根據「福爾摩沙之東所有島嶼的首府是大琉球」一語，塗上黃顏色，屬於琉球。這固然不符史實，但宋君榮以下一系列的地圖中，彭佳嶼都靠東，給人印象就屬於琉球，施蒂勒是遵循成例。至於拉彼魯茲，遊記首版編者註腳說：「宋君榮圖中，釣魚台、南北小島、彭佳嶼三者互相等距，唯獨彭佳嶼未為拉彼魯茲所目睹，不知何故。」

施蒂勒據此，把彭佳嶼畫得西面些，距離釣魚台較遠（圖6下），意在配合編者註腳。雖靠西，而未越出琉球框線，看得出他綜合宋君榮和拉彼魯茲的敘述，審慎釐定彭佳嶼及釣魚台的位置，不敢粗心大意。

七、拉彼魯茲航行澎湖群島之南，忽逢海底有一帶暗沙，即現今所稱台

灣堆」，以好漁場著稱。拉彼魯茲遊記說：「前此海圖都沒有記載此處暗沙，不知道暗沙有無盡頭。」他大概沒看過早期荷蘭人繪製周密的澎湖、台灣地圖。現代人很容易看到荷蘭人科伊倫第二（Keulen II）的著名福爾摩沙地圖中，便有繪載「台灣堆」的範圍（圖7）。

拉彼魯茲所繪地圖中，暗沙形狀迥異於科伊倫（圖8上），並在暗沙邊註云「暗沙不知盡頭」。施蒂勒繼承了拉彼魯茲所繪形狀及所加註文（圖8下），務期克肖。我們由台灣堆的繪法，知道釣魚台亦必繪製嚴謹。

圖7：1753 Johannes van Keulen II
 (科伊倫二世) "De Nieuwe Groote
 Ligende Zee-Fakkel" (海炬新耀)
 www.geheugenamsterdam.nl
 電子收藏號 NESA.01: K.06 1350°

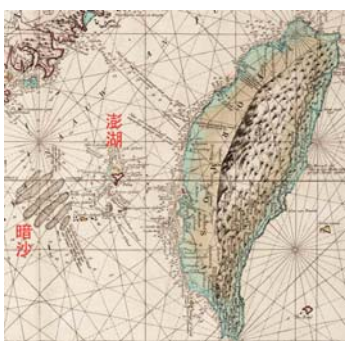


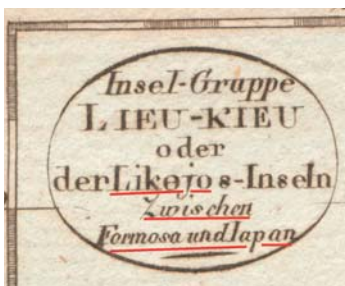
圖8：
 (上) 1797 La Pérouse
 (拉彼魯茲)
 www.davidrumsey.com
 no.3355043°
 "Carte des decouvertes,
 faites en 1787 dans les mers
 de Chine et de Tartarie"
 (西曆1787年支那韃靼海域探圖) 澎湖及台灣堆。
 (下) 1804 Stieler (施蒂勒) "Charte von China"
 澎湖及台灣堆。
 1799のG.N.C.收藏。



八、拉彼魯茲的報告中，琉球二字寫作「Likeu」、「Likeuyo」、「Liqueo」。在他以前，各本地誌只有「Lek」、「Liq」開頭的寫法，唯獨拉彼魯茲有「Lik」開頭。施蒂勒1804年圖的標題有「Likejo」出現（圖9），可知來源是拉彼魯茲。

這裡還須注意，琉球標題下有一句「處於福爾摩沙和日本之間」(zwischen Formosa und Japan)。地圖總標題雖是「China」，但另設琉球專欄的目的，表示它是清國和日本中間的一邦。

圖9：1804 Stieler (施蒂勒)
 "Charte von China" 琉球欄標題
 1799のG.N.C.收藏



以上八個迹象，顯示施蒂勒一絲不苟，根據前人的紀錄判定釣魚台屬於琉球。

施蒂勒還有西元1817年、1822年、1826年的地圖，均皆劃分如此。直至1868年，施蒂勒圖冊終於在釣魚台西側劃一條界線（圖2）。其後史丹福（圖1）等數家所製地圖相繼倣此，成為慣例。

最後提醒一下。有人說釣魚台的拉丁字「Tiao-yu-su」是清國官話，顯示釣魚台屬於清國。這種說法未必正確。清國官話還用在琉球專欄中的「Na-pa-kiang」（那霸港）、「Tai-ping-shan」（太平山，即宮古島）等地，不僅釣魚台而已。

【六】 黄山書社『東傳福音』 所收李浩然撰聖母傳和訓全文

【標題】

聖母傳。天主降生千八百八十七年、江南主教倪准す。

〔倪〕倪懷綸。本名 Valentin Garnier。西曆十九世紀末、イエズス會江南教區の主教。

【自序】

序。それ聖母を敬するは、近代より始まらず。昔、天神、主の降孕を報ずるに、聖母を賀してアヴェと曰ふ、敬の詞なり。眞主耶穌、これを稱して母と爲す、敬の意なり。聖ヨセフ親炙すること數十年、晉接周旋して、時に欽慕深し。宗徒、母事すること殷勤、よく忠にして孝を盡くす。當初の信人、俯懇仰瞻し、膝下に依依たり。其の敬、尤も廣遠に傳はる。是れより厥の後、歴代の教皇、禮期を定め、恩赦を頒し、大堂を建て、聖會を立て、凡そ以て人の敬心を激すべき者、詔を頒して舉行せざるなし。故を以て、闔教、風を同じうし、古今、轍を一にす。天主を敬するを除くの外、未だ聖母を敬ふことの、よく心力を竭くして、其の禮、他に一等を加ふるが如き有らず。此れ何を以ての故ぞ。神人の上、聖母獨り尊し、而してこれを敬ふに加禮有るなり。聖母、權は神聖を超え、救世に功有り、而してこれを敬ふこと生母のごときなり。

聖人ベルナルド・リゴリ等謂はく、人、聖寵無ければよく升天せず、而して聖寵必らず聖母より下ること、飲食の必ず喉頸より入るが如し。是れ聖母を敬するは、ただに理の宜しく然らしむる所にして、責の當に然らしむる所のみならず、而してまた勢の然らしめざるを得ざる所なり。

〔利高烈〕 Alphonse de Liguori 聖アルフォンソ・デ・リゴリ。教會博

士。西曆十八世紀イタリヤ。

〔伯爾納多〕 聖ベルナル。教會博士。西曆十二世紀フランス。

所謂敬とは、義をふくむこと頗る夥し。禮を致すなり、經を誦するなり、功を獻ぐるなり、默禱するなり、孺慕するなり、仰ぎ法（のつと）るなり。凡そこれ皆な敬の事にして、其の根は能く識（し）るに始まる。蓋し必ず聖母を識りて、而る後、愛心起り、恃心生じ、禮を致して以てこれを尊び、經を誦して以てこれを讃へ、功を獻じて以てこれを榮にす。默禱して以て其の佑けを求め、孺慕して以て其の愛に報い、仰ぎ法り以て其の徳に肖（に）せる。

是れを觀れば則ち聖母、識らざるべからず。而して聖母の傳、ひさし。考ふるに西文の實録、百部を下らず。華文はただ高氏一志、曾て一編を著すのみ。今年夏、予、上游の命を承け、是の書を撰述す。事の確實にして疑ひ無き者をとりと、譯して正文と爲す。その學士の議論に出で、頗る憑信するに堪ふる者は、附列して註となす。要はただ略ぼ條綱を擧げ、一を掛して萬を漏らすのみ。而して文詞の工拙は更に未だ計らざるなり。光緒十三年夏、耶穌會季秋・問漁氏著。

〔秋〕 舵の同字異體。

〔高一志〕 漢文『聖母行實』の著者。

【圖2】

天主降生の期すでに邇し、預め貞女を生み、他日救世主の生母となす、斯の女、乃ちマリアなり。始めて胎するや玷無く、寵恩を滿被す。其の生日、萬世人民の慶となす。

〔生日〕 マリアの誕生日は九月八日。

【圖3】

マリヤ年三歳のとき、父ヨアキム、母アンナ、聖堂に送入し、専心して主につかへしむ、また以てむすめを生んで主に獻ずるの初心に副ぶ。

【圖4】

マリヤ年十四にして、天主の命を奉じ、出でてヨセフに字し、終身貞おのおの童貞を守る。日後、懷孕して耶穌を生むとき、内外互ひに相ひ護翼せしむ。

【圖5】

天神ガブリエル、降りてマリヤを賀し、報ずるに聖神の功に頼り、救世主を懷妊す、その國に限界無きを以てす。

【圖6】

マリヤ、天神の報せにより、表姉年老いて胎荒るるも、己に孕むこと六月なりと知る。随ひ即ち前(すす)み往きて謁賀し、同居すること約三月にして歸る。

【圖7】

聖母とヨセフと王令を奉じ故郷に回る。いかんぞベツレヘムに人衆(おほ)く、假寓するに従(よ)る無し、爰(ここ)に城外の山穴に宿る。夜半に至り聖子誕生し、天神樂を奏で、牧童も亦た報せを聞いて來朝す。

【圖8】

耶穌生後四十日にして、聖母とヨセフと、耶穌をとりて恭しく聖堂に獻じ、古禮に遵循す。シメオン一たび見るや心歡び、聲を揚げて主を贊へ、並びに耶穌受難の事を以て、預め聖母に告ぐ。

【圖9】

ヘロデ王、耶穌を害せんと謀る。因て令をベツレヘム郡に下し、盡く二歳以下の孩童を殺さしむ。ヨセフ、天神の報を得て、星夜に程に登り、エジプト國に避く。

【圖8再】

耶穌、十二齡のとき聖殿に赴く。禮し畢り、告げずして獨り留まる。聖母と聖ヨセフと徧ねく訪ぬるも踪無し、卒に聖殿に、高士と經旨を談じ、衆人咸(み)な其の智慧なるを異とするに遇ふ。繼いで聖母・聖ヨセフとともに家中に歸り、厥の命に順(したが)ふこと十八載を歴(へ)たり。

【圖10】

耶穌、聖殿より家に回るや、年日に長じて智日に顯はる。業を托し工を作し、躬親(みづか)ら表を立つ。世の過ぎて自ら尊大にする者、當に亦たこれを見て差慚すべし。
〔托〕扶の形誤か。

【圖11】

耶穌の親串新たに婚し、聖母とともに謙に赴く。席間、酒乏し、聖母以て耶穌に告ぐ。命じて水を六罇に注がしむれば、頃刻にして變じて旨酒となる。

【圖134】

耶穌、十字架上に在り、聖母と若望とともに架下に立つ。耶穌、ヨハネに目し、聖母につけて曰く、「婦人、爾ちが子、ここに在り」と。復た

ヨハネにつけて曰く、「汝ちが母ここに在り」と。これよりヨハネ、聖母につかふること、生母の如くす。

【圖13】

耶穌崩じ、聖ヨハネ等、聖屍をとりて解き下す。聖母、懷に接抱し、悲痛にたへず。諸聖女みな爲（ため）に傷懷し、恭しく殯殮を行なふ。

【圖14】

耶穌升天の後、聖母、宗徒等計一百二十人を率ゐ、共に一堂に聚まり、天主に祈求す。第十日、大聲、風の如き、天より至に入るを聞く。旋（つ）いで火形の舌に似たる、衆人の頂に懸かるを見る。時に當（あた）り聖神降り格（いた）り、衆心に充滿し、能く萬國の方言を言ふ、旋（つ）いで即ち出でて聖教を傳ふ。

【圖15】

聖母、エルサレムに在りて、ヨハネに依ること親子（しんし）の如し。平日聖體を領し、諸徒を訓じ、災を救ひ患を撫し、徳澤、指を屈するにたへず。

【圖16】

聖母年七十二、徳備はり功全く、理として當に報いを獲べし。天主乃ち預め終期を示し、大靈蹟を行なふ。諸宗徒をして空中に高擧し、齊しく聖堂に來らしむ。少頃にして耶穌至り、聖母の魂を迎へて升天す。

【圖17】

聖母の屍、墓に葬らる。宗徒輪守し、天樂常に聞こゆ。第三日早きに、聖トマス至る、衆人棺を啓きて審視し、聖身早くも已に升天すと知る。

【圖18】

聖母升天し、天主立てて以て天地の母皇・世人の主保となす。位高きこと九品、福を獲ること萬全なり。其の愛を吾人に垂ること、遠く世間の慈母に勝る。

〔主保〕媒介ラテン語 *Mediatrix*。聖母神學では聖母マリアを恵みの仲介者とする。

【圖19】

天主降生の約一千二百年、西國の異端、事を滋し、人の信徳を敗る。聖ドミンゴ、聖母の諭を降し、玫瑰經を傳へて異端を驅（く）し陋俗を革（あらた）むるの妙法となすを蒙る。聖人、命の如く遵行し、果たして奇驗を得たり。今教皇レオ第十三、頻りに聖旨を頒かち、信人をして日々玫瑰經を誦し、虔（つつま）しく聖母に祈り、佑けを教中に施さしむ。〔玫瑰經〕ロザリオ。

【未頁圖】

天主降生の一千二百五十年、聖衣會士、聖シモン・ストック、聖母に求む、一の會友を保護し、罪人を蔭庇するの據を賜へと。聖母遂に降現し、手に聖衣を持ち、これに授けて曰く、

「是れ乃ち我が會の號、恩を邀（むか）ふるの券、升天の據なり。爾ちこれを受け、以て人に傳へよ。凡そ終りに至るまで堅信し、身に此の衣を佩びるは、地獄の永禍を脱すべし。

〔聖衣會〕カルメル修道會。

〔聖シモン・ストック〕カルメル修道會の第六代總長。

〔聖衣〕スカブラリオ。修道用の袈裟。

〔邀恩之券〕免罪符。

【正文】

聖母傳。 耶穌會李秋問漁氏著。

聖母は、造物主の降生せしめて人の母となすなり。天主、無始の間に於いて、聖子の降生を定め、即ち一の生母をえらば、則ち天地未だ有らざるの先に、天主早くも聖母をえらぶなり。

〔無始〕佛教語、開始が無いこと。即ち開始の前。

人類の生を傳へ、先知よよ出づるにおよび、天主しばしば先兆を顯はし、用つて聖母將に生ぜんとするを徴す。古經一部、頻りにこれに論及す。或は明陳直指し、或は喩を設けて隱言す。創世記、預め其の魔を攻むるを報じ、歌詞經しばしば其の潛徳を讚す。

〔傳生〕…キリスト教漢語、アダムとイブから生命を代々傳へること。イスラム教漢語を襲用した可能性あり。

〔徴〕…示す、證す。

〔古經〕…舊約聖書創世記三一十五。

〔歌詞經〕…詩篇四十五―十三。

イザヤ謂はく、貞女、子を生み、名づけてエマヌエルと稱す。

〔譯して言はく、天主、我人と偕にすと。〕

此れ皆な天主、預め聖母を選ぶの實據なり。

〔我人〕吾人に同じ。我々。

〔エマヌエル〕イザヤ書第七章第十四節。

〔エマヌ〕我々とともに。ヘブライ語。

〔エル〕天主。ヘブライ語。

聖母の父、ジョアキムと名のり、母はアンナなり。ユダヤ國のナザレ郡

に隸す。二人みな正教を奉じ、功修に密なり。

〔正教〕正しい宗派（ユダヤ教）。

【注】

二聖人、家貲を以て貧戸に周し、兼ねて聖堂に給す。故を以て厚く恵み廣く施すを、遐邇みな企仰すること深し。

【正文】

ただ伉儷なること多年、絶えて子嗣無し。乃ち修省すること勤を加へ、主の胤を錫ふを祈る。矢願す、子を得て後、送りて聖堂に獻じ、天主に奉事せんと。

【注】

相ひ傳ふ、一天神降下し、預め報ず、ジョアキム年内にむすめを生む、宜しくマリアと名づくべしと。學士スアレソ曰く、「古聖イサク・ヨハネバプテスタ等、みな未だ孕まざるの前に、天主其の父母に報す。豈に聖母、天主の母たるに、反つて寂然として報無きや」と。然れば則ちマリアの聖名、天主の定むる所たる、深く信すべきに似たり。

〔保弟斯大〕洗礼者（バプテズマ）ヨハネ

〔蘇亞賈〕 Francisco Suarez。

【正文】

その後アンナ果たして孕み、始めて所望、虚に非ずと知る。凡そ人の孕を受くるや、過惡に沾染す、所謂原罪是れなり。天主ひとり聖母を寵し、救世主將に立てんとするの功を視て、其の玷に染まるに忍びず。昔原祖罪を獲て後、天主預め世を贖するを許し、言はく一女及び子有り、魔と

讐となる、女は則ち邪魔の首を踏破すと。此れ聖母と耶穌とを言ふなり。聖母をして亦た原罪に染まらしめば、必ず邪魔の制する所となる、またいづくんぞ能く其の首を踏破せんや。古へより聖哲の論、萬口同聲なり、故に教皇庇護第九、聖母に原罪無きを定めて、信徳の道理となす。これを信ぜざれば、大罪をう。

〔庇護第九〕教皇ピウス九世。聖母傳刊行前の教皇。在位西曆千八百四十六年から千八百七十八年まで。

【注】

按ずるに前聖の意は、聖母始めて孕むや、寵を蒙ること繁多にして、遠く天神・聖人を逾ゆ。且つ終身過ち有る能はずして、明悟とみに開き、諸徳全て備はる。將來私慾の漸、踪跡も全て無し。母胎に居ること九たび月を閲し、善念勃發し、主を愛すること虔誠なり。古今最大の聖人に較ぶるに、これを過ぐるも及ばざるなし。

【正文】

聖母既に月にわたるや、ナザレに生む。父母歡欣し、普世同慶す。

【注】

超性學士謂はく、「聖母、軀體純善にして、生平疾病無し」と。聖トマス謂はく、「聖容美秀にして、都麗なること無雙なり、ただこれを望めば人をして敬を起こし、貞靜を欣慕せしむること、常人の麗の、人の好色を引くがことくならざるなり」と。聖魂の美、更に言を待たず。けだし聖母、天主に特寵せられ、其の靈必ず聖美なること絶倫にして、妙徳乃ち生發するに易し。

〔超性學士〕Supernaturalist。超自然主義の神學者。

【正文】

若干日を閲し（或は第九日なりと謂ふ）、古教禮を行なひ、名をマリアと立つ。ユダヤ文に海星を言ひ、シリア文に母后を言ふ。聖母、徳表輝きを生じ、人を天路に引く。また天地の母后となし、權、神聖を超ゆ。マリアを以てこれを稱するは、名實相ひ符すと謂ふべし。

〔天路を引く〕海の星が航路のしるべとなることに喩へる。

生後八十日、ヨアキム・アンナ、むすめを聖殿に獻す。すでにして禮物を呈獻し、むすめを抱きて家に歸り、力を致し心を傾け、善く撫養をなす。三歳に周きに、攜へてエルサレムに赴き、天主に獻す。

【注】

司教、マリアの儀容端肅にして、迴かに凡童に異なるを見て、院宇の中にをらしめ、賢姆に命じて善く訓導をなさしむ。マリア、善心を持執し、嬉戲を痛絶す。或は密かに聖殿に登り、天主を朝拜す。或は自ら反りみて心を捫し、嚴しく意念を察す。或は聖道を默思し、淵微を洞察す。凡そ事に勤懇ますます加はり、優に聖域にいたる。女侶の中の懿行風すべき者を見ては、輒ちこれに師事す。長者命有れば、難しと雖も辭せず、實踐善行し、餘力を遺さず。賤役を執りて以て人に事へ、女工をなして以て祀りに供す。貞を守りて終身字せざるを矢願す。古來未だ有らざるの眞修を立てて、萬世童貞の首領となる。同堂の女伴、マリアの大徳群に軼するを見て、先を爭つて法を取る。

【正文】

マリア年十一（スアレス集に見ゆ）、父母壽終る。年十四、司教、戚屬と配を擇ぶの事を議す。マリア議婚の説を聞き、苦口辭して曰く、我が

父母、我れを堂に獻ず、もと終身主に事ふるがためなり。吾れ二親の意を承け、誓つて清貞を守り、もつて主徳に酬ゆ。婚嫁は我が願ひに非ざるなり。司教、其の言に服す、然れども未だ敢へて決せず、マリヤとともに禱る。これを久しくして、天主聖旨を默示す、必らず須らく擇婚すべしと。

〔スアレス集〕スアレスの「Opera Omnia」であらう。

マリヤの院に在ること十一年、後に主旨を承け、ヨセフに于歸す。ダヴィデ王の遠孫に係り、古經に救世眞主、ダヴィデの族に生まると言ふに應ず。

（當時ヨセフ約強仕の年に在る。幼きより精修し、習俗に染まらず。）成婚後、兩人童貞を守るを誓ひ、死に至るまで他志無し。功修に奮勉し、日に徳に進む。世上の人たりと雖も、直ちに天神もただならざるなり。

【注】

聖トマス云く、マリヤのヨセフに配するは、至當と謂ふべしと。其の故は聖子のためにする者四、聖母のためにする者三、世人のためにする者五。何をか聖子のためにする者四と謂ふ。曰く、イエスをして鞠父無かりせば、外教の人、將に疑ひて以て私生子となす、一なり。ユダヤ國の例、男譜を立てて女譜を立てず、男女則ち同宗相配す。ヨセフ有りて配となりて其の譜を詳記するより、すなはち聖母と耶穌との譜を知る、二なり。聖母、婚後に子を生み、邪魔、其の人道に従ふを疑ひ、介するの意をなさず、三なり。イエス幼小の時、まさに人有り供養すべし、ヨセフ實に其の責に任ず、四なり。

何をか聖母のためにする者三と謂ふ。曰く、未だ嫁がずして子を生む、國人將に石を築して撃たんとす、ヨセフに配すれば性命を存す

べし、其の故一なり。夫無くして子を生む、外人疑ひて姦婦となす、ヨセフに配すれば聲譽全うすべし、其の故二なり。弱女、獨活するに難し、況や子を生む者をや。ヨセフに配すれば則ち日用、虞れ無し、其の故三なり。

何をか世人のためにする者五と謂ふ。一に曰く、聖母人道に因つて子を生まず、他人、証をなす能はず。ただヨセフのみこれを証し、以て後人の信を堅くす。二に曰く、聖母をして自ら貞節を言はしむるは、總て是れ一面の詞なり。ヨセフ有りて配となすよりして、聖母の言、信じ易し。三に曰く、貞女獨來獨往、最も疑ひを起こし易し。聖母ヨセフに配するば、貞女輩に教ふ、輕易に獨居すべからず、出入に須べからく女伴有るべしと。四に曰く、聖母貞靜なり、聖會も亦た貞靜なり、聖母ヨセフに配し、聖會イエスに配す、彼れ此れ以て相ひ表するに足る。五に曰く、聖母ヨセフに配すれば、守貞者のために師表をなす、亦た婚嫁者のために芳型を立つ、一舉にして兩善備はる。

或は問ふ、聖母とヨセフと眞に夫婦を成すかと。曰く、夫婦の倫、分に在り、事に在らず。男女偕老すること百年、禮、伉儷を成すは、其の分なり。同居して子を生むは、其の事なり。譬へば男女二人有り、成婚の後、分居すること兄妹の如くし、數十年を歴（ふ）るも一日の如し、夫婦の事無しと雖も、誰か其の夫婦に非ざるを謂はん。聖母とヨセフと、亦た然り。其の事無けれど、實は其の分有り。故に聖トマス・アンブロシウス等、皆な二聖の配を以て、眞の夫婦となすと、しかいふ。

【正文】

同居すること四たび月を閲し、マリヤ年十五にいたる。天主、天神ガブリエルを遣はし、報じて曰く、アヴェ、聖寵を滿被する者よ、主、爾とともにす。女中に爾、讚美せらる、と。

【注】

聖トマス謂く、聖母始めて胎する時、寵を蒙ること極めて多し、よりにて大天神・大聖人のともに相ひ比するべき無し、と。

學士乃ち進み論じて曰く、

「聖母、世人なり。生前能く功を立つる者なり。始めて胎する時、寵を蒙ること既に多ければ、即ち徳を愛すること最も熱く、主に契すること最も密にして、意念心思、常に天主に向かふ。私慾の其の衷を亂す無く、疾病の其の志を分かたず無し。徳、懋にして功、崇し、懸擬するによし無し」

と。則ち聖寵と功德と並び儲し、其の盛なること不可思議なり。

スアレス云く、「予、想ふ、衆天神・衆聖人の寵、併合して一となすも、猶ほ聖母一人の寵に及ばず」

と。斯の言、大なりと謂ふべし。聖リゴリ又た謂はく、「聖母始めて胎する時、寵を蒙るの多き、すでに衆神聖併計の數を過ぎたり」

と。是れを執りて以て推すに、聖母の寵、初胎より始めとなし、日にますます増えて月にますます積む。

垂老の年に至り、更に凡そ幾（いくば）くなるを知らず。加ふるにイエス降孕・降誕・復活・升天、及び聖神光臨の日を以てし、聖母

の寵を受くること、更に平日より多きなり。神魂の寵を受け、兼ねて超性の諸徳・聖神の七恩を受くるを考ふれば、則ち聖母の寵を獲ること最も豊かにして、其の超性の諸徳・聖神の七恩も亦た天神・聖人の上に出づ。それ徳と寵とは、立功の具なり。聖母の寵徳、群れを超ゆ、其の一動一言、おのづから奇大の勲績有り、而して聖母の天主を顯榮するは、衆神聖を逾ゆること遠し。

〔聖神〕聖靈。

【正文】

マリヤ、語を聞きて驚疑し、措く所を知らず。天神告げて曰く、

「マリヤ、畏るるなかれ。幸ひに主寵を獲て、將に一子を孕まんとす、宜しく耶穌と名づくべし、必ずダヴィデの位に登らん。此れ天主のフィリウスに係る、其の國は無限なり」

と。マリヤ、諭を聞いて、何の義なるを解せず。孕を受くれば或は貞徳を損なふを恐れ、因つて謹んで對（こた）へて曰く、

「婢、男子を識らず。子（し）が云ふ所、將に何を以てかこれを行はんとす」

と。

〔天神〕天使。

〔フィリウス〕神の子。

【注】

學士謂はく、「聖母、願を發し貞を守るは、未だ成婚せざるの前に在り、特（た）だ何年何月なるを知らざるのみ。年、婚期に屆くに及び、天主、聖母に默示し、ヨセフは大徳殊恒にして、終に其の貞徳を汚さずと知り、始めて敢へて勉めて古例に遵（したが）ひ、出でてヨセフに字す。後、天神、降つて懷孕を報するに、聖母答ふる

に男子を識らざるを以てす。是れ乃ち業(すで)に發願を經たるの証なり」

と。スアレス等謂はく、「聖母知識初めて開かるるや、便すなは(ち)聖神の導引に従ひ、志を立てて貞を守る。則ち發願は後に在り、而して立志は猶ほ初孕の時に在るなり」と。

【正文】

天神曰く、

「おのづから聖神の汝を庇ひ、上主の佑(たす)けを垂るる有らん。且つ爾が戚、イザベラを觀すや。平生未だ孕まず、年今高邁するに、亦た已に娠を受けて六月なり」

と。マリア對(こた)へて曰く、

「主が婢、茲に在り、願はくは爾が言の如く、事を我に成せ」

と。言ひ訖(をは)るや、瞬息の間に、天主フィリウス、聖神の功に因り、マリアが胎内に降り、淨血化成の體と、

(按ずるに聖師の公論に、耶穌が五官四體、頃刻にして即ち成る。常人の逐漸に生ずるが如くならざるなり。)

天主賦昇の魂とに合す。是れ救世眞主と爲す、主性・人性を兼具す。

【正文】

是れに據れば則ちマリア實に吾が主を生み、天主の母となる。後にマリア、天神のイザベラ受孕の事を言ふを憶ひ、勿迫に整齊し、程に登り往き謁す。(ナザレより聖母の家に至るまで、約三百餘里あり。)

門に及び、禮に按じて稱賀す。イザベラ、語を聆(き)き、聖神の默誘を蒙り、天主、マリアの腹中に降りりと知れり。讚へて曰く、

「女中に爾(なんぢ)、讚美さる。爾が胎子も並びに讚美さる。我れ何人ぞ、敢へて吾が主の母の遠く來りて我を顧みるに當らんや。爾が聲、甫(はじ)めて我が耳に入るや、嬰子胎に在りて欣躍す。天主預許の事、爾能く其の克く成るを信ず、福なるかな爾」と。

マリア曰く、

「我が靈は主を頌(たた)ふ、我が神(しん)は我が救世主を欣悦す。

其の婢女の微に垂顧するにより、萬世將に我を頌へて福と爲さんとす。

蓋し全能者、大徳を我に展(ひろ)げ、その聖名を彰らかにし、世世これを敬畏する者に慈恵すればなり。その臂を以て大能を顯(あら)はし、

心志の驕れる者を麾(き)し、尊者を黜(しり)ぞけて高位より出でしめ、

撝謙なる者を陟舉し、饑乏たる者には貸して以てこれを實(みた)し、

富める者は乏しからしめてこれを遣る。其の慈を回憶するに、其の

僕イスラエル(ヤコブ)を援救すること、悉(ことごと)く祖アブラハム等暨(およ)び

後世の子孫に許せる者の如くす」と。祝し畢(をは)り、イザベラ、

聖母を接して内室に入らしめ、同居すること約三月にして歸る。

と。

【注】

ヨハネの誕生する時、聖母已(すで)に返ると否と、學士この論、

一にして足らず。其の以て已に返ると爲す者謂はく、「天神、聖母

に報じてイザベラ受娠六月と言ふ。聖經、聖母のイザベラが家に在

りて、約居ること三月なりと記す。既に約三月と言へば、必ず未だ

三月に満たず、前の六月と併せてこれを計れば、尚ほ九月の孕期に

満たす。則ちヨハネの生まるるは、聖母の家に回(かへ)りて後に

在るなり」と。

聖アンブロジウス謂はく、「聖母心を存すること恒に靜かにして、囁譚を痛絶す。如（も）しヨハネの誕生を待たば、行くゆく裙履の庭に盈ち、親隣屬集するを見んとす。大いに聖母幽閑の度に合はず。故に未だヨハネの誕生を待たず、匆據に家に歸る」と。

其の以て未だ返らずと爲す者謂はく、「聖母、報を領するの日、聖婦（イザベラ）すでに孕むこと六月なり。既にして行李を整備し、長途を跋涉するは、又た數日を需（も）とむ。約三月を以てこれを併合すれば、必ず九月の久しき有らん。則ちヨハネ生まるる日、聖母猶ほ未だ啓行せざること、疑義を容るる無し」と。

況や聖母の往きて聖婦（イザベラ）に見（まみ）ゆるは、専ら相ひ助くるの計の爲なり。産期ここに邇（ちか）し、助けを需（も）とむること更に殷なり。聖母、情有れば、能く暫らく高駕を留めざらんや。又た況やヨハネ、天主の特寵と爲す、聖母豈にこれを知らざらんや。既にこれを知れば、必ず音容を一覩し、聊か戀慕を伸ばさんと欲せん。豈に未だ靚ずして返るを肯んぜんや。

【正文】

初め聖母の受孕するや、ヨセフ未だ嘗てこれを知らず。聖母の腹日に起るに迫（およ）び、ヨセフ大いに疑慮を爲し、解かんと欲すれど由無し。マリアも亦た聖ヨセフの憂心耿耿たるを覺ゆ。但し謙讓を以て懷と爲し、未だ敢へて受孕の事を明言せず。惟だ天主にこれを慰めよと乞ふ。

【注】

聖ヒエロニムス謂はく、聖ヨセフ、聖母の大徳、必ず閨箴に違犯せざるを明知す。第（た）だ先知の士、曾て貞女の子を生み、斯民を

救贖するを言ふに因り、想へらく聖母即ち是れ斯の女なりと、故に自ら薄徳何ぞ敢へて與（と）もに居せんやと慙（は）づ。ここに於いて一再躊躇し、措く所を知らず。是れヨセフの疑ひ、謙退より出づ、怨讟の意無きなり。

【注】

もしヨセフ果たして聖母を疑ふと謂はば、是れヨセフを淺視すること亦た已に太だ甚だし、乃ち不可なる母からんや。説者謂はく聖母イザベラに謁するに、ヨセフ未だ嘗て隨行せざれば、未だ聖母の讚美の詞を聞かず、亦た未だ天主降孕の事を知らず。此の説、是に近く、學士往往にしてこれに従ふ。或は問ふ、ヨセフ未だ隨行せざれば、聖母將（は）た誰と同行するかと。曰く、意ふに必ず使女輩或は同族の人有りてこれに隨ふと。

「近是」もと「近似」に作る。音近くして誤ったと思はれる。今改める。

【正文】

いくばくも無くして、天主一天神を發し、ヨセフが室に臨んで聖母受孕の奇を以て、夢中に曉諭せしむ。ここに於いて恍然として領悟し、日後ますます聖母を敬ぶ。産期將に至らんとするに迫り、たまたま西國の總王、令を國中に下す。人民おのおの本郷に返り、報冊もて京に送り、重ねて版籍を修めしむ。ヨセフと聖母と、もとベツレヘム郡の人なり、令に従ふに樂なり。隆冬凜烈にして、道途修阻すと雖も、束装して道に就く。

〔西國總王〕ローマ皇帝。

【注】

聖ベルナルトと教中の諸學士と謂はく、「聖母の懷孕するは、廻はるかに常人に異なる。厥の月將に彌（み）たんとして、聖胎外に著はると雖も、而も康強輕捷なること、往時に異なる無し。ナザレよりベツレヘム郡に往き、山に陟り嶺を過ぎ、行走すること自如たり。他婦の重滯困頓し、步履に艱しむがごとくならず」と。

【正文】

冬至後三日、ベツレヘム城下にいたる。時に行人充斥し、逆旅の納るるを肯ずる者無し。二聖すなはち山穴に宿る。この夜の半ば、産期已に届く。聖母獨り幽隅に處り、黙して上主に祈る。少頃にして垢副の患ひ無く、聖子を誕生す。未だ貞身を損はず、依然として處女なり。これを譬ふるに日光の玻璃瓶に出入して、玻璃の完好なること故の如きなり。

【夾注】

スアレス曰く、耶穌始めて生まるるや、殆ど天神の手に接抱し、聖母に恭授するなり、と。

〔殆〕 推測の辭。

【正文】

聖母、襁褓を以て聖子を裹（つつ）み、かりに馬槽に置く。先づ臣禮を盡くしてこれを拜し、繼いで母情を以てこれを懷（いだ）く。聖ヨセフ、其の奇を目撃し、恪敬すること至極なり。誕後第八日に追ひ、古教の例に遵ひ、割損の禮を行なふ、名を耶穌と稱ふ、譯すれば救世者を言ふ。〔裹〕もと裹に作る。今改める。

【注】

按ずるに聖母、淨血を以て耶穌が體を成し、又た氣血を以て其の長ずるを助け、己が乳を以て其の生を養ふ。是れ耶穌の身、實に聖母これを生む。而して他日聖血を傾流し、世人を救贖し、功を立つること無量にして、耀を獲得すること無窮なり。復た聖體の事蹟を建て、神靈を涵養す。其の原を推すに、皆な聖母より出づ。

論者謂はく、「聖三は聖母と最も相ひ親密なり、他聖比擬する能はず」と。何となれば則ち聖父、無始の間に於いて、聖子を生んで第二位となす。聖母、吾主の聖軀を生むは、第二位に合す。是れ聖父と聖母と、一は主となし、一は人となし、相ひ去ること無窮なるも、而も職任を以て言はば、並び論すべきに似たり。此れ聖母、聖父と相ひ親しきなり。

聖母は聖子と骨肉の誼み有り、毛に屬（しよく）し裏に離（り）し、氣血相ひ通ず。情意の摯なる、更に常人を逾ゆること遠く甚だし。此れ聖母、聖子と相ひ親しきなり。

凡そ天主外發の工は、皆な聖三共に作す。但し聖經の義に按ずるに、事功の權能を顯はす者は聖父に歸す。智謀を顯はす者は聖子に歸す。仁慈を顯はす者は聖神に歸す。聖母の子を生むは、最も主が慈を顯はす。聖神の功、これより大なるは莫（な）し。此れ聖母、聖神と相ひ親しきなり。

聖トマス云ふ有り、

「天主の尊は無窮なり、即ち天主母の尊も亦た無窮なり」

と。聖ボナヴェントウラ云はく、

「天主能く別に天地、現有の天地よりも大なるを生ず。別に一母、

更に天主の母より尊きを生ずる能はず。夫れ尊は敬の本となす、聖母既に寵と位と並び尊く、諸神聖を超ゆれば、即ち吾人の聖母を敬拜するも、亦た當に衆神聖の上に在るべし。故に聖教、聖母を敬禮すること、恒に他聖人を逾ゆるなり」と。

【正文】

東國の三王、天に異星の懸かるを見て、知る是れ大主初生の兆なりと。乃ち千里を遠しとせず、躬自（みづか）ら來朝す。黄金・乳香・沫藥三事を出だし、虔誠に貢獻し、俯せて拜し稱頌す。聖母、三王を接見し、愉悦に勝へず。後、古教の規に従ひ、靜居すること四十日、戸庭を出でず。繼いで乃ち子を抱きて堂に獻じ、滌潔の禮を行なふ。

【夾注】

聖母、童貞にして子を生む、何の汚れかこれ有らん。惟だ古例に遵循し、守法を以て後人に教ふるなり。

【正文】

たまたま大徳の士シメオン・賢嫗アンナ、皆な主の默感を蒙り、來りて耶穌を迎ふ。シメオン、耶穌を接抱し、聖母に謂ひて曰く、「斯の子は正鵠の如く然り、世人の射る所となる。將に利刃有りて爾が心を刺さんとす」

と。聖母、語を聞き、五中に銘刻す。旋（つ）いで耶穌を懷きて里に回る。

ユダヤ王ヘロデ、新主誕生すと聞き、其の位を篡するを恐れ、令をベツレヘム郡に下す。凡そ二歳以下の男子は、盡く殺して遺す無かれと。主天神に命じ、夢にヨセフに示し、亟（すみ）やかに王が害を避けしむ。

ヨセフ、夜に連なつて首途し、聖母・耶穌と偕（とも）にエジプト國に往く。櫛風沐雨し、窘難備（つづ）さに嘗む。

【注】

或は謂はく、「聖母、主を獻じて後、エルサレムより頼みに即ち程を起し、前（す）みてエジプト國に往く」と。此の説未だ憑となすべからず。今の註經家、概ね謂はく、「聖母、仍（な）ほナザレに回り、安居すること如干日にして、始めてヘロデの患ひ有り」と。

難ずる者曰く、

「ヘロデ王、早くに新主誕生を聞き、隣國の三王も又た一たび去つて返らざれば、則ち王心焦灼し、刻も待つに及ばざらん。豈に俟つこと數十日、或は數月の後、始めて殺孩令を下すを肯ぜんや」と。曰く、

「聖アウグスティヌス、嘗て此の疑ひを設く、已にして自ら解きて曰く、ヘロデ一日萬幾、未だ必ずしも常に新主を思はず。殆ど其の心を他務に馳せ、未だここに及ぶに暇あらず、故に聖母、禮を京中に行なひて、仍ほ梓里に回るなり」と。

【正文】

既にエジプトの境に入るや、土人、聖母が大徳に感じ、咸な相ひ敬愛す。如干の載を閲し（或は七年と云ふ）、天神復た聖家を引き、ここに故國に旋（かへ）らしむ。初めガリラヤに居り、後、ナザレに居る。毎年聖母とヨセフと京に晉みて瞻禮し、耶穌とも往く。耶穌年十二のとき、京に赴きて瞻禮し畢るに、聖母とヨセフと衆に隨ひてここに旋る。耶穌

獨り留まり、二聖知らざるなり。

二聖の寓に抵るに及び、始めて耶穌を失ふを覺(さと)る。遍なく索むるも踪無く、憂心慄(や)くが如し。第三日早きに、復た殿中に入る(第一日、寓に回り、第二日、寓よりエルサレムに返る。故に第三日早きに始めて殿に入る)、耶穌の高士の間坐して、經旨を問ふに答へ、侃侃として談ずるを見る。

聖母呼びて曰く、

「吾が子、爾が何ぞ我を離るるか。爾がが父と我と、爾がを求めて憔悴するなり」

(先づ爾が父と言ひ、後に我と言ふ、亦たヨセフを敬ふ意なり。)

耶穌曰く、

「なんすれぞ我を見むや。豈に知らずや、聖父の事の在る所、われ賞まさ(に)躬(みづか)らこれに與(くみ)するを」

と。言ひ訖(をは)り、二聖とナザレに回り、操作起居して恒に厥(そ)の命に順ふ。聖母、神(しん)を凝らして欽仰し、諸事をとりて切に心に記す。

統計するに十八年、耶穌と聖母と言行如何なりや、聖經未だ嘗て詳載せず。然れども理に據りて以て推すに、聖母日に耶穌と處り、心心相ひ印し、念念相ひ求む、其の謙恭親愛、端肅慈祥、道を論じ工を作し、跪つき禱り叙談する等、一として洪功至徳に非ざる無し。天堂を除くの外、更に聖善の地の聖母の家中の如き者無し。特(ただ)に旁人の觀感のみならず、諸天神も亦た當に訝異(がい)欽慕すること、言状すべからざるべし。

但し世間は福を享くるの地に非ず、況や耶穌、清貧もて標を樹(た)て、萬世の儀型となる。故を以て聖家の中、擔石も儲け無し、極めて窘乏を形(あら)はす。聖ヨセフ、日に梓人の業を以て、値ひ少し許りを得て用つて鋤口に資す。聖母と耶穌とも亦た操作すること殷勤にして、始めて克く自給す。

【注】

學士スアレス云はく、

「論者謂はく、聖母以下、惟だヨセフの徳最も大なりと。聖經未だ嘗て言はずと雖も、而も此の事、頗る憑信するに堪へたり。蓋し凡そ天主の重任を人に降すや、必ず其の職に稱(かな)ふの寵を與(あた)ふ。ヨセフは聖母が淨配、耶穌の鞠父となす、當に聖母を保護し、其の貞靜を全うせしむべし。又た當に耶穌を撫養し、日後に救世の大功を成さしむべし。責任の重き、これより甚だしきは莫し。則ち主寵特(ひと)り隆く、他聖を逾ゆること知るべし」と。

又た耶穌、聖徳の源となす、聖母、諸徳の表となす、愈よこれに親めば愈よ其の化を被る。古へより聖人、未だ耶穌・聖母に密邇すること、大聖ヨセフの如き者有らず。則ち其の徳行の崇巍なる、從つて想見すべし。耶穌云はく、「勺水を以て小子に與ふれば、必ず其の報いを獲(え)ん」と。況や聖ヨセフ、半生拮据し、耶穌を饜養す。吾主これを寵すること、必ず他聖に過ぎて、而して聖徳これに因り猛長せん。

又た教中の公論、「聖母を敬すれば必ず靈佑を獲ん」と。ヨセフただにこれを敬するのみならず、抑(そもそ)も且つこれを助く。聖

母必ず天主に代求し、恩をヨセフに加へしめん。而して徳は恩寵の
 效となす、自然日にますます増高す。

【正文】

聖母とヨセフと、淨配たりと雖も、其の恩誼の篤き、尋常の夫婦に萬倍
 す。越えて如干載にして、ヨセフ年老い力衰へ、一たび病むや起たず。
 聖母親ら其の終を送り、哀悼に勝へず。

耶穌年三十にして、四方に宣教し、本國を周行す。親串ありて新たに婚
 す、耶穌と聖母とを延(まね)きて謙に赴かしむ。席間酬酢すること方
 に殷なるに、酒忽として罄くるを告ぐ。聖母これを知り、良(まこと)
 に忍びず。耶穌に告げて曰く、「酒乏し」と。耶穌答へて曰く、「婦人よ、
 余が時未だ至らず、此の事何ぞ爾ちと我とに預せんや」と。

【夾注】

耶穌、聖母を呼びて婦となすは、輕賤の詞に非ず。乃ち以て、奇を
 行なひ異を顯はすは、天主の神力より出で、婦人の生む所の性の冒
 昧に従事すべきに非ざるを明らかにす。耶穌の意は曰ふがごとし、
 「爾ち婦人なるのみ。爾ちが我に與ふる所の者も亦た人性なるのみ。
 今爾ちが懇する所、人性の能く及ぶ所に非ず。烏(いづく)んぞ思
 はざるべき」と。

【正文】

聖母、聖意を默會し、僕人に囑して耶穌が命を聆かしむ。少頃にして耶
 穌、水を六縁に注がしめ、旨酒に變ぜしむ。倏忽の間、已に醇醪となる。
 司席者未だ其の故を知らず、大いにこれを異とす。是れ耶穌、奇を行な
 ぶの始めとなす。聖母の其の端を開くにより、従つて知る聖母の天主に

代求するや、言として虚出する無しと。凡そ人の聖母に懇禱するや、所
 望に副はざる有ること鮮(すくな)し。

【注】

聖母の祈禱するは、亦た耶穌の功を藉(か)ると雖も、然れども其
 の益効、迥(はる)かに他聖に異なる。何となれば則ち天神・聖人
 人に代りて主に祈るは、猶ほ臣の君に求め、僕の主に求むるがごと
 し。聖母は聖子の生母となす、聖子に求むるは母の子に求むるが如
 く、言聽かれ計従ふこと、勢の必ず至る所なり。

スアレス謂はく、「聖母の禱るは、衆神聖の共に禱るよりも靈なり。
 譬へば聖母の一事を求むるや、天朝を舉(こぞ)る天神・聖人皆な
 不可と曰ふに、天主寧ろ衆神聖を拂ふも、聖母に垂允するが如し。
 噫。聖母の權、誠に大なる哉」と。

竊かに謂(おも)へらく、代禱には必ず三事を須(ま)つ、而して
 聖母兼ねてこれ有り、並びに其の極みに造(いた)る。代禱する者
 須らく主に寵せらるべし、斯に進言必ず納れらるるを望むべし。乃
 ち聖母の主に寵せらるること、實に衆神聖の上に在り、一なり。代
 禱する者須らく我人の困厄を知るべし。聖母天に在りて主に見(ま
 み)え、即ち天主の性體より、世人の窘難を灼見し、纖屑も遺す無
 し、他聖に較べて更に明徹となす、二なり。代禱する者須らく慈悲
 の心有るべし、斯に其の心力を用ゐるを肯んず。聖母、世人の主保
 にして、救世主の生母となす、人を愛すること他聖に萬倍す、(詎(あ)
 に代求を肯んぜざるの理有らん、三なり。

前の聖人は聖母の慈祥を張らんと欲するも、幾(ほと)んど詞の以

て白する無し。聖ベルナルド謂はく、

「聖母の仁、遠廣高深にして、よく度量する莫し。遠きは則ち今日より世末に至るまで、これに求めて應ぜざる無し。廣きは則ち普世の萬方、地として其の恩澤に沐せざる無し。高きは則ち上天の人、並びに厚恵に沾（うるほ）ふ。深きは則ち暗に居するの靈、幸ひに救援を獲るなり」と。

聖グレゴリオ・ニコメディア謂はく、「聖母の大權、能く攻め敵する莫し。聖母の大力、能く阻止する無し」と。

聖人ゲルマヌスと致命イグナチオと皆な言はく、「世人の升天するは、一として聖母の佑けに頼らざる無し」と。

聖ベルナルト・アントニー又た謂はく、「世人の寵を受くるは、必ず聖母の手を経るなり」と。

（聖グレゴリオ・ニコメディア）ニコメディアの聖グレゴリオ。リゴリ著「マリアの榮え」（Le glorie di Maria）第一章第六頁に見える。

（聖ゲルマヌス）西曆六世紀、パリ大司教。

（致命イグナチオ）古代ローマ迫害時代の殉教者。シリアのアンチオケの人。

（聖ベルナルト・アントニー）アントニーの聖ベルナルド。不明。

此れ聖母に求めざれば、必ず寵を得ずと謂ふに非ず。第（た）だ聖母、至大の主保にして、萬民を汎愛し、微として至らざる無きにより、人の求むるを待たずして先に衆人のために禱る。故に天主、耶穌の功と聖母の禱りとを視て、甘んじて人に聖寵を與（あた）ふ。これ由りこれを推せば、耶穌は首（かうべ）の如く然り、聖母は頸の如く然り、衆信人は身の如く然り。天主の聖寵、皆な頸より身に入る。

【正文】

耶穌、教へを傳ふる時、母子相ひ離れ、未だ能く朝夕に遇はず。然れども耶穌、間時に歸省するは、想ひて知るべし。

【注】

聖エピファニウス・ベルナルド謂はく、

「耶穌、傳教すること三年の間に於いて、カペナウム城に住すること多きに居す。聖母屢（しばしば）往きてこれに謁し、用つて忱悃を舒ぶ。又た復た駕に隨つて従行し、遍ねく他邑を歴（へ）たり。

一に則ち聖諭を聆き、一に則ち日用を供す。耶穌、エルサレム・ヨルダン河畔に往くとき、聖母皆なともに在り。

（聖エピファニウス・ベルナルド）ベルナルドのエピファニウス。不明。

【正文】

經に記す、耶穌の聖訓を宣講するや、一日、聖母、門弟と往きてこれを觀る。多人門戸に擁擠し、充塞して入る能はず。人有り耶穌に告げて曰く、

「爾ちが母暨び兄弟、門外に鶴立し、汝どものいはんと欲す」と。耶穌曰く、

「誰か我が母となす、誰か我が兄弟となすや」と。手を擧げて門弟を指して曰く、

「斯れ乃ち我が母、我が弟なり。凡そ天にいます我が父の旨を行なふは、即ち我が弟、我が妹、我が母となす」と。

〔經〕マルコ福音書

〔與門弟往觀之〕門弟は誤り。兄弟に作るを正とする。
〔指門弟〕聽講者らを指さして。

耶穌のこれを言ふは、聖母を輕視するに非ず。乃ち以て神魂の親しきは更に骨肉の誼みよりも貴(たつと)きを明らかにす。意に謂はく、「爾が曹(ともがら)、ただ我を生む者の我が母たりて、我と同宗の者の我が兄弟たるを知る。殊に知らず、聖父の旨を承行し、我を認めて聖父の子となし、神魂に福を獲て、永く我と偕にするは、其の誼み大いに威の誼みに愈(こ)ゆ。我が生母と宗弟とは固より大福を獲たり。然れどもただに骨肉の故を以てに非ざるなり。

經に記す、耶穌受難の期已に邇(ちか)きに、エルサレムに前赴して稍も畏避せず。是の時にあたり、匪徒、耶穌を毒恨し、必ずこれを死地に置かんと欲す。聖母これを聞き、立ちどころに即ち道に就き、エルサレムに往く。至るにおよび、耶穌已に遠せらる。

【注】

ボナヴェントウラの黙想書と、ブリジットの黙啓記とに據れば、耶穌の柱に繋がれ鞭を受くるや、聖母、旁に在りて親(みづか)ら見る。

【正文】

耶穌の十字架を負ひて城を出づるに追ひ、聖母、疾を力めてこれに踵ぎ、道に遇ひ、耶穌、塵埃の面を掩ひ、聖血淋漓たるを見る。一時に涙を流して心を痛むること、口舌に能く宣述する所に非ず。

【注】

學士謂はく、「聖母神魂超抜にして、仰げば聖三に契す。哀慘至極にして涙を流すこと注ぐが如しと雖も、然れども號咷絮聒の聲、從りて未だ一たびも口より出せず」と。

【正文】

この時、良家の婦若干輩有り、耶穌の難を被るを見て、代りに爲(ため)に傷懷す。蓋し女子惻隱の心、一時に流露す。以て聖母の憂ひに比すべきに非ざるなり。耶穌、架に懸かる時、聖母、架旁に站立し、數聖女とともに悲悼すること深し、涕淚交も流る。

【注】

論者謂はく、聖母の痛み、七事に即きて以てこれを思ふべし。一に曰く、常人は母有り又た父有り。其の誼分かたれ、其情も亦た減す。獨り聖母のみならず。子を生むこと人の道に由らず、其の子を愛するの情、常人に勝る。即ち子を憂ふの心も凡衆を超ゆ。

二に曰く、耶穌の難、至大にして倫無し。聖血傾流し、聖身破裂す。加ふるに聖心の痛みは、更に身上の痛みよりも甚だしきを以てす。而して聖母これを知ること甚だ明らかなれば、これを哀しむこと自然に極めて切なり。

三に曰く、人の難を聞くは、親(みづか)ら見ると異なれり。耳に聞くは心を動かし易からず、目に覩れば則ち中情頓みに發す。況や母たる者、子の難を見るをや。古經に記す、「婦人ハガル、子の渴死するを見るに忍びず、道旁に棄置し、目を閉ぢて遠く」と。聖母は則ち親ら吾が主の苦難を見る、傷むこと何如ぞや。

〔ハガル〕アブラハムの妾。息子イスマイルとともに放逐されて砂

漠を彷徨した。

四に曰く、耶穌の難、山園に祈禱するより、架上に釘せらるるに至るまで、時たる殊に久し、故に聖母の感(うれ)ひ、ますます深し。
〔山園〕橄欖山のゲッセマネ園。

五に曰く、難中に慰め有れば、尚ほ支持すべし。而して聖母、一人の撫慰するも無く、加ふるに諸宗徒離散し、ユダ自ら戕し、惡黨吾が主を視ること劇讐の如きを以てす。三年の間、多く仁恩を受け、一旦に志棄す。ここに念じてこれに及び、愁腸寸斷す。

〔ユダ〕『福音書マタイ傳』二十七章五條では、イエスが捕縛された際にユダは悔いて自殺したとされる。

六に曰く、聖母、心に主を榮えしむるを専らにす、未だ意に拂ふ事有らず。もし人の天主を辱しめ、耶穌、難を被る時、ユダヤ人の耶穌を漫罵し、惡聲の耳に盈(み)つるを見れば、聖母の心、能く怒焉として擣(うつ)つが如き無からんや。

七に曰く、痛悼は愛情の中より出づ。聖母の痛み如何なるを知らんと欲すれば、先づ當に其の主を愛するの情如何なるを知るべし。聖母の愛、天神と聖人と皆な及ぶあたはず。即ち聖母の痛み、以てこれに尚(まさ)る無し。

前聖人、聖母の痛みを論ず、其の言、纏述するにたへず。聖アンセルモ謂はく、「致命の苦、聖母の苦に較ぶれば、致命も苦となすに足らず」

と。聖ベルナルドと聖ボナヴェントウラの説、大約相ひ同じ。

或は問ふ、「聖母、架旁に佇立す、其の心なにを想ふ」と。曰く、

「聖母、耶穌が性命をとりて聖父に獻げ、以て救世の大勲を成す。聖賢謂はく救世の一事、聖母あづかりて功有り」と。

一に則ち天神、子を生むを報ずるの時、聖母應へて曰く、『爾ちの言の如く、事を我に成せ』と。此の時の一諾、實に救世の漸となす、關する所甚だ大なり。

二に則ち耶穌、聖母に生まるるや、其の贖世の聖血、聖母より其の源を得たり。

三に則ち耶穌、木架に釘せらるるを以て、天主を祭祀するや、聖母ともこの心を見ず。

〔天主を祭祀す〕不明。

ただ是の故に、學士、耶穌を以てアダムに比し、聖母を以てエヴァに比す。アダム、人類を敗り、エヴァこれを誘ふ。耶穌、人類を援け、聖母これを助く。福禍、途を殊にし、適(まさ)に相ひ觸背すれど、而も其の情實、相ひ似る有り。

夫れ聖母、既に贖世に功有り、又た天地の大主を生む。聖教これを稱して神聖天地の后となすは、理として當に然るべし」と。

〔今註〕ここまでが「なにを想ふ」の問ひ對する答へである。

【正文】

耶穌、ヨハネを指し、聖母に謂ひて曰く、

「婦よ、此れ爾ちが子なり」

と。又た聖母を指し、ヨハネに謂ひて曰く、
「此れ爾ちが母なり」

と。前聖人、この語を註解し、謂はく、「耶穌この時に於いて、聖母を立てて衆人の母となす、故にただにヨハネを以て聖母に托するのみならず、實は衆信人を以てこれに托するなり」と。

【注】

聖人アウグスティノ・アントニー、皆な此の説有り。而るに格羅塞『聖母傳』謂はく、「聖師の論、大率斯くの如し。耶穌曾て聖女默低第に面諭す、大旨相ひ同じ」と。

〔聖人アウグスティノ・アントニー〕聖アウグスティノ及び聖アントニー。不明。

〔格羅塞〕グロッセ、クローセ等。不明。

〔聖女默低第〕不明。マグダレーナの近似音だが、下文でマグダレーナは瑪大肋納となつてゐる。

【注】

或は問ふ「耶穌、聖母を呼びて婦人といふは、何ぞや」と。曰く、

「聖クリソゴヌス云はく、『稱するに母を以てすれば、未だ傷心を免れず、且つ惡人の辱を致すを恐る、故に婦と稱して以てこれを隠諱す』と。或は又た謂く、『ユダヤ文、婦人に夫人の意有り。稱するに婦を以てするは、乃ち聖母を尊敬するなり、隠諱の辭に非ず』と。」

【正文】

耶穌崩じ、聖母の心ますます痛し。ロンギヌス、力もて聖肋を刺し、血水下に流る。聖母これを哀しむこと、親受に較べて尤も甚しとなす。日已に晡(ほ)す、ヨハネ等、聖屍をとりて架より放下す。聖母、懷に接抱し、敬して塵埃を滌ひ、棘茨を抜き去る。彼の時、聖母の慟するや、言語を以て形容すべからず。

〔ロンギヌス〕イエスを刺した兵長。外典『ピラト行傳』に見える。

殮既に竣(をは)り、恭しく聖身を新塚に葬る。聖母ともに墓所に往き、瞻望して慘哭す。暮るるに及び、諸宗徒と齊しく城中に返る。

【注】

相ひ傳ふ、聖母はマルコが母マリアの家に寓すと。耶穌、聖體の妙蹟を建つるも亦たここに在り。後三日間、聖母沈靜無言にして、聖子を追思す。悲しみを含み泣(なみだ)を飲み、日夜悽涼なり。

【正文】

第三日の早きに、耶穌、墓より出で、逕(ただ)ちに聖母に詣る。明光四射し、聖母、悼を轉じて歡となし、耶穌の榮福を欣賞す。

【注】

耶穌復活して後、聖經未だ其の先づ聖母に見(まみ)ゆるを言はず。但し教中の公論、皆な謂はく、「此れ必然の事にして、猶豫するを容れず」と。聖アンブロシウス・イグナチオ等、咸(み)な此の説有り、今に迄(およ)ぶまで奉じて確論となす。或は難じて曰く、「聖經未だ載せず、烏(いづく)んぞ憑となすに足りんや」と。

聖アンセルモ對(こた)へて曰く、「聖經惟だ記するを要する者を

記す。耶穌初めて復活するや、先づ其の母に見(まみ)え、後に其の徒を見(けん)す。此れ情理の常なり、亦た人事の少(か)くべからざる所なり、記すを待たずして人自ら知る、何ぞ必ずしも賢及せんや。又た觀るに耶穌、マグダレーナに現はれ、兄弟に回報せよと命じ、母に報ずるを言はず。此れ他無し、耶穌と聖母と業(す)でに相ひ晤(あ)ふを経たり、必ずしも報ぜざるなり」と。

〔マグダレーナ〕マグダラのマリヤ。

夫れ憂と樂とは、情相ひ反して理相ひ合す。聖母、主を愛するの故を以て、主が受難を哭すること、凡衆に逾ゆ。耶穌復活の日に至り、主の樂しきを樂しむこと、人の意料の外に出でん。

或は謂はく、「耶穌、世に在ること四十日、屢(しばしば)ば宗徒に現はれ、詳しく天國の事を言ふ。聖母に至っては常に倍して親密に朝夕欣逢せん」と。此の説、縦ひ實証無きも、亦た情理の宜しく然るべき所なり。

【正文】

四十日を閱し、耶穌升天の期已に屆く。聖母、宗徒等百二十人を率ゐ、耶穌に隨ひてオリブ山に登る。

至るにおよび、耶穌訓諭すること諄諄として、情致殷渥なり。手を擧げて福を衆に降し、作別の禮を行なふ。隨ひ即ち直ちに上りて升騰し、天國に榮登す。聖母首を仰むけて遙瞻し、悲喜交も集まる。

既にして城内に回り、某氏の廳事に入る。

(相ひ傳へてマルコが母マリヤが家となす。即ち耶穌、聖體を建立する

處なり。)

宗徒等とともに天主に祈禱し、聖神をして臨格せしむるを乞ふ。

第十日、聖神果たして降る。火舌の形に托し、衆人の頂に臨む。陰に奇恵を施し、心神を黙化す。聖母、寵を獲ることひとり隆く、衆徒を逾ゆる遠きこと甚だし。

【注】

超性學士言はく、聖神の降臨し、衆心を堅固にするは、堅振の聖事を逾ゆ。故に聖母と諸宗徒とただ聖洗禮を受け、未だ嘗て堅振の事蹟を領せずと。

【正文】

是れより聖母、ヨハネと宗徒とに依り、エルサレムに居す。平日、虔禱して道を思ひ、須臾も間無し。信徳至つて堅く、望徳至つて切に、愛徳至つて熱し。謙退慈善に、淡泊にして躬を持す。諸凡の妙功、一として其の極に造らざる無し。

聖アンブロシウス謂はく、「聖母の言行は萬世の準則となす」と。曠(よ)き哉この言。

諸宗徒、教へを外方に傳へ、従ふ者日に盛んなり。聖母、報せを聞き、毎(つね)に爲(ため)に色喜ぶ。就きて助けを求むる者有り、聖母其の憂ひを慰め、其の困(くる)しみを解き、其の疑ひを釋し、其の疾病を治し、其の心思を堅からしむ。求め有れば必ず應じ、難有れば必ず憐れむ。故を以て遠近、風を聞き、咸な聖母に一見するを以て幸事と爲す。

甚だしきは國を越て都を過ぎ、千萬里を遠しとせずして來る者有り。名士弟阿尼削、遠邦より海を航して至る。聖母に一見するや、心輒(すなは)ち訝異す。嘆じて曰く、「苟しくも早く其の生人たるを知るに非ざれば、われ將に天上の神を以てこれを目さんとす」と。

〔弟阿尼削〕ディオニシオス。不明。

諸宗徒、疑難の事に於いて、つねに聖母に就正す。天主降生後約四十四年、エルサレムの信人、大いに窘難に遭ふ。當道の捕縛すること甚嚴にして、身を置くに足を容るるの地無きに因り、己むを得ず聖ヨハネ、聖母とともにエフェソス地方に往き、暫く棲止を爲す。後仍(な)ほエルサレムに回り、歿日に迄(おも)ふ。

【注】

スアレス等の大名の學士、意(おも)へらく聖母、耶穌升天より以後、衆信人と日に聖體を領し、聖子と相ひ契す。ただ細過も染まる無ければ、克(よ)く告解の聖事を領せず。聖母、天主の母たるを論ずるに至つては、其の尊位權能、衆天神・衆聖人の上に超出す。凡そ宗徒と他聖と能く行ふの事、病を療し誓を啓き、災を救ひ患ひを除くが如きと、死人を活かし、後事を言ひ、人の隱衷を掲し、學ばずして萬國の方言を道(い)ふ等と、聖母も亦た能くこれを行なふ。但だ聖母は至つて慈なり。求め有れば必ず允し、柄あれば必ず行なふ。況や聖教初めて開かれ、正に須らく多く靈蹟を顯はすべければ、則ち聖母在世の時、聖蹟必ず多し、言はずして自づから驗さ(と)る。

〔柄〕權。

或は難じて曰く、

「既に靈蹟有れば、必ず人の記載する有らん。何ぞ聖經・古傳、默黙として言無きや」と。

予これに應へて曰く、

「聖經、耶穌の事を記すや、一を掛けて萬を漏らす。聖ヨハネ謂はく、『耶穌之事、書けども書くに勝(た)へず。もし盡くこれを録せんと欲せば、普世も其の籍を容るるなし』と。耶穌の事すら尚ほ未だ盡く書かず、況や聖母の事をや。又た聖教初めて起るや三百年、信士流離して、頻りに巨患に遭ふを以て、其の早に聖母の事を記すのみなるは、亦た情に原すべき有り」と。

【正文】

聖母年七十有二(或は六十有三と云ふ、其の説これに従ふ者鮮し)、徳備はり功全く、理として應に報いを受くべし。天主先づ天神を遣はし、預(あらかじ)め終期を告ぐ。事、ヨハネに聞こえ、立ちどころに外に傳ふ。踵をめぐらさずして、通城の信友、紛として至り沓として來る。咸な聖母に一見し、親ら遺訓を聆かんと欲す。

天主、聖母の天に歸するの事を以て、宗徒に默告す。并びに大奇工を行なひ、諸宗徒をして空中に飛擧し、趾を移すを勞せざらしむ。瞬息の間にもエルサレムに抵(いた)る。惟だトマスの宗徒のみ未だ至らず。聖母、宗徒・信士の咸な一堂に集まるを見て、諄諄として訓を垂れ、敦く主を愛し人を愛せよと囑す。

升天後、時に常に佑を伸ばし、信人を默助するを許す。言ひ已むや、耶穌、羣天神を率ゐて來迎す、聖母乃ち病まずして終る。

聖ヒエロニムス謂はく、天上の衆神、大いに光耀を張り、賀詞を歌唱し、出でて聖母の魂を遊(むか)へ、引きて高座に登らしむ。諸宗徒、恭しく殯禮を行なひ、欣感すること似るもの無し。

聖ヨハネ・ダマスコと名賢儒物納と謂はく、

「聖母將に終らんとするとき、群神歌咏し、ともに天樂を奏つ。既に卒(しゅつ)するや、天神、諸宗徒と聖身を護送し、ゲッセマネ墓塚に葬り、掩ふに大石を以てす。三日夜を連ねて、群神恒に駐し、天樂常に聞こゆ。宗徒等墓上に輪守し、頻りに聖詞を唱(うた)ふ。第三日の早きに至り、天神の樂忽として已む。たまたま聖トマスも亦た至り、聖屍を一觀せんと欲す。ここに於いて衆を集めて棺を啓く。異香の鼻を撲つを覺え、衾絹猶ほ存す、而も聖身香として踪跡無し。蓋し己に復活升天せり。當時、場に在りし者、諸宗徒を除くの外、又た諦毛徳・弟阿尼削・日勞徳等有り。衆人これを見て、忻愉して勝へず、經を咏じて主に謝して退く」と。

〔聖ヨハネ・ダマスコ〕ダマスコの聖ヨハネ。

〔儒物納〕Juvencalか。

〔ゲッセマネ墓塚〕マリアは一説にゲッセマネに葬られた。現在マリア

永眠教會がある。

〔諦毛徳〕聖テモテか。

〔日勞徳〕ジェラルド、ジロードか。

〔弟阿尼削〕ディオニシオス。不明。

【注】

相ひ傳ふ、聖母、マルコが母マリアの家に死すと。學士謂はく、

「聖母の生時、主を愛すること心誠に、熱きこと烈焰の如し。其の久しく生きたる所以の者は、天主の陰佑に頼り、未だ情火の焚く所

とならざるなり。危に瀕するに至るに追ひ、天主復た阻止せず、遂に愛情猛發するを致し、身能く支へず。奄奄として一息、片時にして即ち絶ゆ。聖身、墓に在ること三日、未だ嘗て朽腐せず。蓋し聖母に罪無きこと、耶穌に肖似す。其の聖軀又た耶穌の寶血の由つて生まるる所なり。自(おのづか)ら宜しく善く無傷を保ち、早く天神の上に列(つら)なるべし」と。

【正文】

聖母既に升天するや、聖父其の功徳に鑒み、これを九品天神の上に撰ぬ(きん)で、立てて天地の母皇・世人の主保となす。

【注】

按ずるに天堂の福の最も大なる者は、天主に見(まみ)ゆるを享くるに在り。仰慕稱讚して、永く窮盡無し。聖母、功を立つること最も富み、寵を受くることひとり隆し、故に榮福眞光を得るも亦た最大無比なり。故を以て、天主に見(まみ)ゆること至つて明らかなり。天主を愛すること至つて熱きなり。中心悦樂すること、神聖の能く幾(ねが)ひ及ぶ所に非ざるなり。寶座の高き、諸天神・衆聖人の上に在り。權柄の大なる、萬物神人皆な其の令に従ふ。

童貞を以てして苦を忍ぶこと萬状にして、宗徒を訓誨す。故に童貞聖師致命の榮を得ること、一として其の類を超えざる無し。聖身獨り玷染無く、吾が主耶穌を生み、救世の大功を成す。故に其の天に輝耀するは、明月升りて衆星皆な晦きが如し。

學士スアレズ謂はく、「聖母、天主の妙體を觀(み)て、古往後來の萬事萬理を知るを得たり。各人、中にを意念を藏し、未だ嘗てこ

れを口より出さざる者と雖も、亦た一として知らざる無し。惟だ天主、耶穌に與ふるの旨のみ聖母に告げず、推測するに由無し」と。

又た謂はく、

「聖母の福、大なること與に京（ひと）しき無し。衆天神・衆聖人の福の若きは、併合して一となすも亦た聖母の福に及ばず」

と。此れ學士の言なり。或は問ふ、

「聖母を敬禮すれば必ず天國に升るは信（まこと）か」と。曰く、

「斯の語、當に説有りて以てこれを解くべし。按ずるに教中の定論、天主の明示するに非ざれば、人預しめ升天をトふ能はず。聖經に云ふ有り、『主に愛せらる、或は主に惡まる、皆な未だ知るべからず』と。即ちこの意なり。」

聖母を敬禮すれば必ず天堂に升るの説、聖經未だ嘗て言はず、依りて確論となし難きに似たり。但だ超性學士謂はく、『數事に即きて、以て某人の升天の選に在るを知るべし』と。聖パウロ云はく、『聖神、我が神（しん）に黙告す、我は天主の義子なり』と。聖ヨハネ云はく、『もし我が心、我を責めざれば、主に望み有るべし』と。二聖の言、皆な此の義を指す。

所謂升天の兆は、約九を以てす。志を奮つて罪を免るる一なり。恒心祈禱す二なり。甘んじて主命を承（う）く三なり。頻りに主が難を思ふ四なり。聖道を聆（き）くを喜（この）む五なり。謙退己を保持する六なり。楽しんで人を愛するの工を行なふ七なり。勤めて主を敬ぶの事をなす八なり。第九は則ち聖母を敬禮し、始め有り克く終る。蓋し聖母を誠敬すれば必ず寵佑を蒙る。偶爾に失足すと雖も、

聖母將に力めてこれを援け、これを天府に登さんとす」と。

聖アンセルモ曰く、

「凡そ人の聖母に歸附するや、必ず淪喪に至らず」と。淪喪と云ふは地獄に下るの謂ひなり。

聖アントニー曰く、

「凡そ聖母の顧みる所となれば、必ず天上の眞榮を獲ん」

と。夫れ聖母の顧みる所は必ず聖母を敬ぶの人なり。否なれば則ち其の僕を顧みず、反つて他人を顧みるや。

聖フィリップ・ネリ、教友に告げて曰く、

「汝ち、死に至るまで聖寵を失はざらんと欲すれば、須らく聖母に恭敬すべし」

と。眞福勃爾格孟も亦た云はく、

「凡そ人の聖母を虔敬するや、必ず克く善終せん」と。

〔聖斐理伯・フィリップ・ネリ。西曆十六世紀の聖人。〔勃爾格孟〕ベルグモンか。ベルグマンか。不明。〕

惟だ世人、妄りに天后を恃み、故（ことさ）らに情慾を肆にすべからず。蓋し妄りに恃むは則ち聖母を辱むるなり、而して聖母を敬するに非ず。其の憫みを垂るるを期すべからざるなり。

【正文】

諸宗徒、ナザレ郡に聖母の宮室有り、乃ち天主降孕の處なるを憶ひ、欣然として行き拜す、禮意加はる有り。始めは則ち臺を立てて像を設く、繼いで則ち主を祭り經を談ず。信士前（すす）み赴き瞻禮し、厚福を

賜はるを祈る。望む所虚ならず。

天主降生後一千二百餘年、土民、洪恩に辜負し、慢として敬を加へず。

天主顯らかにこれを罰し、寇賊の境に入り、大いに戕害を肆（ほしいまま）にするを容（ゆる）す。聖母先づ天神をして聖室を拔擧せしめ、空中を飛越して、大海を渡りてダルマチア國に至る。隣邦これを聞き、咸な往きて拜覲す、恵を受くること良（まこと）に多し。

〔寇賊〕西曆千二百六十三年にマルムーク朝がナザレを破壊した。

〔ダルマチア〕今のクロアチア西南部、アドリア海に面する。聖室は西曆千二百九十一年五月十日にダルマチアに移された。

未だ四載ならずして、國民又た復た褻瀆し、聖母、聖室を意國ペーザロ省某山に徙す。善人往き朝する者、踵（きびす）相ひ接す。但し地、深林に處し、盜賊充斥す。堂を守る者甚だこれに苦しむ。

〔未四載〕聖室は西曆千二百九十四年十二月十日にダルマチアからイタリアに移された。

〔意國〕イタリア。

〔ペーザロ〕イタリア中部東岸の都市、アドリア海に面する。ロレートの聖母の北に位置する。

聖母乃ち三たび聖室を左近の一山に徙す。山主兄弟二人、往來する人衆（おほ）く、利を獲ること紛繁なるに因り、遂に貪婪の意を生じ、互ひに相ひ害するを謀る。

聖母ますます悦ばず、又た其の室を隣近の小山に徙す。主人、ロレートと名のり、遂に以て聖室に名づく。今に至るまで數百載、復た移動せず。信人往き拜する者、多く恩恵を蒙り、竹を傾むけて書き難し。

〔ロレート〕現在マリアの聖室で著名な町。

〔傾竹〕磬竹（竹をつくす）に同じ。

【注】

以上に言ふ所を按ずれば、聖母實に天主が母となす。凡そ世人たる、皆な當に聖母を敬奉し、認めて主保となし、拜して天后となすべし。これを愛すること慈親の如く、これに則ること師表の如し。聖教初めて建つるより以來、上つかた教皇より、下つかた愚魯に至るまで、苟しくも信心有らば、一として敬禮を行なはざる無し。

惟だ是れ異端の蜂起し、邪説の横行するや、異教の生徒、往往先づ聖母に背き、然る後その惡念を熾んにす。此れ何を以ての故ぞや。

聖母を敬すれば必ず慈佑を獲て、魔鬼も能く任意に鳴張せざるに因り、故に必ず人を誘ひて聖母に背かしめ、而して他惡これに隨ふ。

〔異教生徒〕プロテスタント教徒。聖母を重んずべきでないとする。

異教の人藉口するの辭を考ふるに、謂はく、「至尊惟だ天主のみ、理として宜しく欽敬すべし、餘は皆な主に造を受く、曷（なん）ぞ克く我が敬禮に當らんや」と。殊に知らず尊に差等有り、即ち禮に隆殺（りゆうさい）有るなり。天主自ら萬福を具す、尊、量限無し、これを拜するは其の權を認むる所以なり。其の恵みに報い、其の威を敬し、其の佑けを求むるは、是れ主を敬するの上禮となす。

聖母のごときは則ち人なり。其の高位に居り、大權を乗り、恩を施すこと廣厚にして、遠きとして届かざる無ければ、天主の前に在りて、感する有れば必ず通じ、求むる有れば必ず應ず。且つ天主の意人の聖母を敬奉し、其の榮耀を揚ぐるを欲す。故に在教の人民、異

地同風、先を争つて禮を致す。其の義、天主を敬すると大いに異なる。

己を欺き人を欺くの罪、勝(あ)げて道(い)ふべけんや。

(七四)

(終)

(2016年10月31日 受理)

一には則ち共に聖母の人たるを知り、未だ嘗て敬して天主となさず。二には則ち聖母は才能功德、皆な天主の界(ひ)する所なり。聖母を敬するは、已に天主を敬するの意を寓す。彼の異教の人、誣(し)ひて言はく、聖母を敬するは後人より創(はじ)む、古に亘(わた)つてかくの如きに非ざるなり」と。此れ又大謬然らず。

聖アウグスティノ・クリソゴヌス・ヒエロニムス・アンブロシウス・エピファニウス・パシリオ等、皆な天主降生後三四百年間の人なり。其の道を講じ書を著はし、人に勧めて聖母を敬せしむる、今に迄(およ)ぶまで考ふべし。

經に載す、天神、聖母を頌して曰く「アヴェ」と。アヴェとは敬の詞なり。聖婦イザベラ、聖母に謂ふ、「女中、爾ち讚美せらる」と。讚美も亦た敬の意なり。ルカ記す「耶穌、聖母の命に順ふ」と。命に順ふは、敬の真憑なり。

耶穌の十字架に懸かるや、聖母を以てヨハネに托す。是れ特(た)だに一己の聖母を敬ふのみならず、又た聖徒のこれを敬ふを欲す。諸宗徒・衆信人、主が心を默會し、争つて相ひ欽奉す。聖教初めて傳はるの世、即ち禮節書・墓中像等有り、當日信人咸な聖母を敬するを明證す。

乃ち異教中の人、審察を加へず、其の祖先も亦た聖母を敬するを忘れ、反つて敢へて口に信(まか)せて胡言し、天后を侮辱す。其の